
バカとクロスとドタバタ騒動

テンペスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとクロスとドタバタ騒動

【Nコード】

N2156Q

【作者名】

テンペスト

【あらすじ】

Fクラスを中心に巻き起こる騒動！

クロスオーバーはありますが、出てくるキャラは全部作者の趣味です。基本オリキャラは出さないようにします。

登場キャラに関してのご不満などは受け付けておりませんので悪しからずm(´`´)m

コラボは現在、怪体真書0だけの予定ですが随時加入もあるかも？
笑いあり！興奮あり！恋愛あり！恒例のバカテストもあり！涙・・・
はないかも。

バカテスト 一問目 英語

問題 以下の文を訳しなさい。

That's a falsehood. I had been
framed. Otherwise, I can't explain
it.

姫路瑞希の答え

それは嘘です。私は騙されました。そうでなければ、説明がつきません。

先生のコメント

その通りです。文自体は難しいのですが falsehood が謀略という意味の嘘、had been frame で罠に嵌められるという意味を知っておかなければなりません。

最後の文も、『説明できない』を説明がつかないという訳し方も非常に上手いです。

知識問題ですがさすが姫路さん。良く訳せています。

土屋康太の答え

それは

先生のコメント

デジャヴですね。君は単語をある程度想像して文を作る能力に欠けていますね。
分からない単語があれば、ある程度予測して文を作る努力をしてください。そうすれば、自然と英語力というものは伸びます。

出雲桃の答え

(涙でぐしゃぐしゃに濡れている)

先生のコメント

解答欄が空欄というのは良く見ますが、涙で濡れているなんてそうそうありませんでした。
それほど分からなくて涙ぐんでいたんですね。大丈夫です。その気持ちをお忘れずに勉強に励めば分かるようになります。わからない事

があつたら、先生たちにも聞いてくださいね。応援しています。

吉井明久の答え

嘘だあ————ッ！これは罠だ！可笑しいじゃないか！！

先生のコメント

先生も『DEATH NOTE』のファンです。

第一話 転校生

ここは、文月学園。世界初、『試験召喚システム』という独自のシステムを導入している、進学校である。

試験召喚システムとは、科学とオカルトと偶然で完成されたシステムで生徒のテストでの出来具合——即ち得点に比例して強化される『召喚獣』を呼び出す事が出来る。

そして彼らは、この召喚獣を用いてクラス間同士で戦いあう試験召喚戦争——所謂『試召戦争』を繰り広げ、相手クラスの施設を攻略する。

何故、相手クラスを攻略する必要があるのか？それは年度の初めに行われる振り分け試験にて区別された、教室や待遇などの段階的差別があるからである。

簡単に言えばA〜Fクラスまであり、当然最高のAクラスは設備も待遇も全て一流のもの。逆に最下位のFクラスは凄惨な設備や待遇、何より不名誉を受ける事になるのである。

試召戦争で勝つことにより、戦敗クラスの設備とを交換できる。これにより、生徒のモチベーションを高め、社会に貢献できる者の輩出を目指すのである。

————これは、その最下位であるFクラスで起こる、非日常的な彼らの日常を描くものである。

キンコンカン・・・・

在り来たりなチャイムが今日も教室内に響き渡る。

何度聞いても、本当にため息が漏れるんだよなあ、この音を聞くと。極貧設備の畳、そしてその上に置かれたちゃぶ台の上で更に僕――

――吉井明久は上半身全てを、それに預けていた。

いつもいつも思うが、365度美少年の僕にこの待遇はやはり酷いと思う。

「よお明久。何を項垂れてるんだ？」

そこにライオンのような赤く逆立つ髪の毛、僕の悪友がやって来た。僕の悪友――――坂本雄二だ。悪友になったのは一年生の頃からだけど、時々ウマが合うんだよね。常日頃ぶっ殺してやりたくなる事も・・・おっと、つい口に出しちゃっ

「で？まだ俺の世界を狙える右を味わい足りないのか？」

「ごめんなさい。ご馳走様です。」

ああ。こうして僕の美しい顔は醜くなってしまう。

何かあると拳を持ち出すんだよなあ、コイツ。中学生の頃、喧嘩ばっかりで地元じゃ恐れられていたんだっけ？

全く、こんな奴がこのクラスの最高得点者（今では違うけど）兼クラス代表を務めていることに違和感を感じざるを得ない。

たまに認めなくちゃならない事はあるにはあるが。

「それで、何で項垂れていたんだ？」

「……この間、取引したばかりの写真を……ッ！」

「ああ、姉に没収されたわけだ。」

「いや、僕の目の前で王水に浸けた。」

「それは確かに惨いな。俺ですら絶叫する。」

今でも忘れない、僕の眼に焼き付けられている。

可憐な姫路さんや美波、秀吉の写真が生々しく溶解していくあの悲しみは……ッ！

雄二も、同じ境遇を味わったのか珍しく同情してくれる。

確か幼馴染の彼女に自分の聖典エロほんを焼却処分されたんだっけ？

「……その時は、またご贖目に。」

「うん。その時はよろしくね、ムッツリーニ。」

更に寄ってきた、僕の悪友の一人。土屋康太、人呼んで「寡黙なるムッツリーニ性識者」だ。

本人の並々ならぬスケベ心と、それに反応してエロ要素さえあれば鼻血噴出は余裕な男だ。故にこう名づけられた。

けれども、その鼻血での出血死も恐れぬ心と、己の欲望を満たすために培われた身体能力は度々僕らを助けてくれる。

例えば？写真販売とか、プリントTシャツ販売とか。最近じゃ、DVD発売も計画しているらしい。

「安心しろ明久。……今日は上物が来る。」

「上物？どういう意味さ。」

「何じゃ知らぬのか、明久。」

続いて現れたのは、僕らのオアシスこと木下秀吉だ。

大きな翠の瞳に可憐なその顔、けれどもどこかあどけなさがあり、尚且つ色気もある。

本人は男って言い張ってるけど、いい加減己の過ちを認めたほうがいいと思う。

認めたくないものだな。若さゆえの過ちというものを。

「今日は転校生がくるらしいのじゃ。」

「へ？転校生？」

「そうだ。ウチに、しかも二人な。」

「・・・しかも俺のアダルトな調査によれば（ダバダバ）一人は年頃の女生徒。しかも可愛く、スタイルも抜群らしい。」

ムツツリーニの情報網に間違いはないだろう。

こうやって本人が意識もせず、余計な形容詞をつけたり鼻血を出しているくらいなのだから。

あ、倒れた。貧血だなこりゃ。

「アンタ達。またバカやってるの？」

「明久くん達はやっぱりいつもどおりですね。」

現れた女子二名。

一人のポニーテールの女の子は、島田美波さん。スレンダーな足と女子としては有り得ない身体能力の高さが魅力的。

もう一人の髪も胸もボリウムたっぷりの女の子は姫路瑞希さん。

本当はAクラスの学力なんだけど、分け合ってこっちのクラスになっちゃってる。

「あ、転校生の話をしててね。」

「転校生ね……。ウチらともすぐに仲良く慣れればいいんだけどね。」

「大丈夫です。明久君達とならすぐに仲良くなれます。」

美波や姫路さんも、新しい転校生に期待大のようだ。

そして何より泣かせる台詞を言ってくれる姫路さん。ああ、この優しさが美波の薄い胸部に含まれてくれれば————ふぬおおおあああッ!?

「アキ、アンタ今失礼な事を」

「ま、まだ口には出してないよ!」

「ホオ?“まだ”……ね。」

「……あ、いえ違うんですよ美波さまああああああっ!!」

この人、今日で僕の体から左腕を無くすつもりだ。

「お前ら！朝のHRを始めるぞ！」

おっ、此処で来た！鉄人だ！これで勝つる！

「西村先生と呼べ。（ガッシリ）」

「すいません西村先生ッ！だからこのアイアンクローを解除してッ！」

さっきからこのクラスは妙に心を読みすぎだと思う。

全くプライバシーの侵害も程ほどだというのにどうしてこう被害は僕だけに被るのか。

この鉄じ————西村宗一先生は鉄人レースことトライアスロンが趣味らしい。

おかげで人間離れた肉体とスキル、おまけに全教師の中でもトップクラスの頭脳を有しているなど正に人外生物。

「人を化け物みたいに呼ぶな。（ギリギリ）」

「みぎやあああっ！わ、分かりましたからあーっ！」

だからって、人の心を読むのは酷すぎる。大事な事なので二回言った。

でも必死の祈りが通じたのか、ハアとため息一つで介抱された。

うう・・・僕の世界の遺産となるべき頭脳に罅でも入ったらどうするんだこの鬼教師！

「さて、今日は転校生を紹介したいと思う。」

おっ、来た来た。本日のメインイベントだ。

正直言って僕は誰が加入してくるのか、結構楽しみである。

一人は女子との事だからもう一人は男の子だろう。だとすれば仲良くなりたいたし、女子だったらぜひともムッツリーニの手で素晴らしいポージングを収めた・・・おっといかん、涎が。

「では入りなさい。」

鉄人の野太い声に導かれて、二人の人間が姿を現した。

一人は白髪にさっぱりとした髪型の男の子だ。見た目だけだったらごくどこにでもいそうな。

もう一人の女の子は————可愛い・・・！アレはポニーテール・・・なのかな？それが途中で二方向に分かれている。桃色の髪は、随分長くてつやつやしている。

そして何よりそのルックス！特に胸！顔の可愛さといい、姫路さんにも劣らない・・・！

「ぬんッ！！（バゴォッ）」

「し、島田！？どうした急にちやぶ台を拳で真っ二つにして。」

「す、すみません先生！行き場の無いウチの憤りをどうか許してください！」

おっと、美波の無いもの強請り故の行動か。

正直アレはそうなくても仕方ないと思う。だって普段だったら激しく注意する鉄人だって「今後は気をつけろよ？」の一言で済ませているのだから。

改めて、二人が黒板に名前を書き終える。

「えー、なるたきそうたろう鳴滝宗太郎です。」

「い、出雲桃と申します!」

宗太郎、と名乗った男子は軽い口調だ。大して緊張していないらしい。

反対に出雲さん、という女の子はかなり声が上擦っていた。

「県外からやって来た二人だ。全員、仲良くするように。」

当たり前の事を述べて、鉄人は去っていった。

どうやら授業まで間を空けておくつもりらしい。多分、この間にこのクラスの雰囲気馴染んでもらおうとしているのだろう。

さすが、体罰ばかりやっていてもこんな気の利く教師だから教育委員会には訴えられないんだね。

「よう、鳴滝。」

「お前は？」

「俺はこのクラスの代表、坂本雄二だ。」

雄二は早速、転校生に声を掛けていた。

うんうん、率先して友情を深めにいくとは。あんな奴にもそんな情があったとは。

「代表……って事は一番頭がいいのか？」

「そうは見えないか？」

「どっちかというと肉弾専門かと思ったんだけどな。」

「おいおい、挑発か？」

「喧嘩はやめてくれよ。その右スレートは喰らいたくない。」

うーん、見る限りじゃあそこまで仲は悪くなさそうだ。

鳴滝君は意外と取っ付き易いのかもれない。

次はムツツリーニが自己紹介をしている。この分だと僕の自己紹介は最後かな……。

「おい、明久。」

「どうしたの雄二。」

「あの鳴滝って奴・・・面白いぞ。」

？ 雄二の言っている意味が分からない。

確かにそこまで他人との干渉を拒んでいる様子も無いし、次に自己紹介をしている秀吉とも笑いながらコミュニケーションをとっている。

「アイツ、中々の観察眼の持ち主だ。」

「何でそんな事が分かるのさ？」

「俺が喧嘩得意だって見抜いてきたからさ。」

あ、なるほど。確かにそういえばそうだ。

雄二の喧嘩の強さはこの近辺じゃ有名だろう。でも、確か鉄人は県外からって言ってた。

つまり鳴滝君は雄二の事を知らないはずなのに、喧嘩が強いって見破った。

オマケに得意な右ストレート、とまで付け加えて。

「そこまで観察でき、尚且つ頭の中ではほぼ結論をくみ上げる頭脳・・こりゃ試召戦争でも期待できそうだぜ・・・。」

だからコイツは真っ先に挨拶しにいったのか。

何気ない会話のやり取りでそこまで分析し、試召戦争に繋げようとするその頭脳はさすが神童と呼ばれた指揮官肌の男だ。

「ほれ明久、次はお主の番じゃぞ。」

「あ、ゴメン。僕は吉井明久。よろしくね鳴滝君。」

「よろしく。それから俺の事は宗太郎でいい。」

「そっか。それじゃよろしく宗太郎。」

しっかりと握手してくれる宗太郎。うん、人柄的にも、雄二の10倍より良さそうだ。

「あ、あのっ、みなさんっ」

「ん？ ああ、えーと・・・出雲さん？」

そこにやってきたのは、宗太郎と同じく転向してきた出雲桃さんだ。先程まで姫路さん達と自己紹介をしていたのだろう。

それにしてもテンパりすぎなのは、と思ってしまうくらいに緊張している。

「は、はいっ。改めまして出雲桃です！」

「あはは。よろしく、出雲さん。」

うんうん。姫路さんに似て礼儀正しいいい子のようだ。

と、ここで視界の端に誰かを捕らえた。あれは————小型扇風機を手になっているムツツリーニ？

「・・・スイッチ、ON。」

「え？あ、きゃあああッ！！？」

おお！なるほど、風であのスカートに隠された神秘を解き明かそうと言うんだねッ！？

小型ながらムツツリーニが改造を施したものらしい、扇風機の風は出雲さんのスカートを巻き上げる。

そしてそのまま、それが晒されようと————。

「せ、センサー達見ないでくださいッ！！！」

「「ぐぼおっ！？」」

気がつけば、顔に激痛が走って視界が180度入れ替わる。

そのまま出雲さんのビンタを喰らったらしい、僕と宗太郎はそのまま壁を突き抜けて校舎外に飛ばされてしまった。

お、女の子なのに洒落にならないこのパワー・・・。

「・・・へえ、コイツも戦力として使えそうだぜ・・・。」

雄二は・・・僕の安否など一切気にしていない。

寧ろ出雲さんの女の子らしくない怪力に大いに関心を抱いていた。出来ればこっちのほうにも関心を向けて欲しいと思う。

「うう・・・って言うか出雲さん。」

「は、はい？あ、さっきはスミマセン！」

「いやいや、いいよ。慣れっこだから。」

ここでさっき殴ってしまった事を詫びてくれる。うんうん。いい子だなあ。実に雄二とは大違いで。

「ムツツリーニ、ペンチプリーズ。」

「や、やめてっ！爪がなくなるとプルトップが開けづらくなる！」

だから、どうしてこのクラスは心を読む奴が多いんだ。

「で、何ですか？吉井さん。」

「あ、うん。何で宗太郎を『センサー』って呼んでるのかなって。」

気になった事を訊ねてみた。

宗太郎って、「センサー」ってつけられるような年齢でもないのに。

「俺、実は医者を目指してるんだ。」

「はい。桃は子供の頃からセンサーのお手伝いがしたくて・・・」

その時だった。Fクラスに不穏な空気が流れ始めたのは。つまり……そういう事だったのか、宗太郎。僕“ら”は君を許さないよ。

「これより、異端審問会を開催する。」

『『イエス、ハイエロフロント。』』』

「な、何だ何だぁ!?!」

あっという間に、紫色の覆面とローブに身を包んだ審問者が、宗太郎を取り囲む。

宗太郎はあっという間に磔となった。

磔の足元には良く乾かした薪を並べておく。そしてそんな彼の目の前に、われらが須川会長が血の気を帯びた視線で宗太郎を見つめる。

「キヤーツ!?!せ、センサー!?!」

「だからこれは何だぁッ!?!」

あ、そっか。二人は知らないんだよね。

……このFクラスにおける、鋼の掟を。

初犯という事なので、須川会長が実に威厳を持った声で周りの部下達に言葉を投げかけた。

「諸君、ここはどこだ?」

『『『最期の審判を下す法廷だ!』』』

「男とは?」

『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

そう、イチヤイチャするリア充カップルは絶対に許さない。

決して踏み入る事緒を許されぬ聖域に手を触れた、汚らわしき者は命を以って贖わせる。

すると二人が慌てて講義を申し立てた。

「ちょ、何でそこで愛って言葉が出てくるんだ!？」

「そうです!ただ桃とセンサーは幼馴染なだけで・・・」

「よろしい!ならば拷問だ!」

幼馴染。その言葉で、人を殺せてしまう魔法の言葉。どこぞの魔法使いが使う『アバダ ケタブラ』なんかよりもずっと恐ろしい。

活目せよ、須川会長のありがたき演説を。どこかの少佐のような演説を。

「諸君私は拷問が好きだ。諸君私は拷問が好きだ。諸君私は拷問が好きだ。」

教室で、路地裏で、地下で。

世界中のありとあらゆるところで行われる拷問が大好きだ。

水車に貼り付けられて悶え苦しむ者を見ると気分爽快になる。

火炙りにされている者を見ると心が和む。

電撃の刑などを見た時はもうたまらない。

石畳などというわびさびの効いたものならば心が躍る。

直々に鞭で肉体を抉る感触に、私は歓喜の涙を流す事が出来る。

強力な溶解液で体中塗りたいくるのもまた感動モノだ。

冬の滝に打たれさせた時には最早笑いが止まらない。

生皮を引っ剥がして全身酢でぎゅぎゅ洗うなんてものは絶頂すら覚える。」

これが我ら、異端審問会の恐ろしさだ。

おお。宗太郎だけでなく出雲さんも涙目か。だが、幾ら後悔し懺悔した所でもう遅い！

「お前ら！そろそろ授業を始めるぞ！」

「おお西村先生！全く趣旨が違うとは言え助けてくれた事にはGJ！」

ちっ、鉄人が此処で介入してくるか！

仕方がない。現時点での処刑はやメだね。ま、この続きは後でゆっくりとさせてもらおう・・・。

☆

「全く、今朝は酷い目にあった・・・。」

「そーです！知らなかったとはいえ酷すぎます！」

「「「ごめん・・・」」」

午前中の授業が終わって昼休みの屋上。

虫でも射殺せそうな鋭い視線に、僕ら三人は睨まれていた。こればかりはムツツリーニと雄二も、素直に謝罪を述べている。出雲さんのあの怪力は喰らいたくないのだろう。

「全くお主らは……。ほれ、さつさと弁当を食べようぞ。」

「あ、そうだね。」

ここで僕らはお弁当を広げあおうとした。けれどもその前にやる事がある。

全員、ニヤリと視線を歪ませる。

「何のやる気だ？」

「ああこれ？誰が飲み物を纏めて買うか、所謂パシリ決めのジャンケン。」

「へー、そうなんですかー。」

「宗太郎と出雲さんは今日始めてだから傍観してていいよ。」

幾らなんでも今日転向してきた人が、万が一パシリになっちゃったら可哀相だからね。

「その優しさ、今朝の時も見せて欲しかっ」

「さー行くよっ！」

大声で有耶無耶にして見せた。こうやって場を切り抜けるなど、どこぞのカエル型宇宙人も良く使

う常套手段だ。

「ジャーンケーン……」

「「「「ポン!」」」」」

みんながそれぞれ、掌を突き出す。

僕らはパー、だけれども雄二はグーだ。

「ちッ、今日の貧乏くじは俺か」

「じゃ僕はレモンティー。」

「私はストレートティーをお願いします。」

「ウチはミルクティーね。」

「すまぬな。ワシは緑茶じゃ。」

「……コーラ。」

雄二に向かって百円玉を突き出す。

やれやれ、と自分の不運を恨んでいると雄二が宗太郎と出雲さんにも手を伸ばした。

「ホレ、お前らは何がいい?」

「そーだな……んじゃサイダーで。」

「桃はCCレモンでお願いします。」

ここは言葉に甘えるのが礼儀だ。

二人とも自分の好みの注文と、百円玉を雄二に渡す。

『重くなりそうだな・・・』と苦々しく呟きながら、雄二は走りこんでいった。

「それじゃ改めてお弁当広げようか。」

「え？あの、坂本さんを待たなくていいんですか？」

「いいのよ桃。待たせると余計に気を使わせちゃうんだから。」

そうそう、美波の言う通りだ。

でも下の名前で呼ぶなんて美波と出雲さん、仲良くなったんだなあ。

「わあ。明久君のお弁当、今日も綺麗ですね。」

「まあね。一応僕が作るんだからね。」

「ん？それ、明久が作ったのか？」

宗太郎がおにぎりを詰め込みながら僕の弁当を指差した。

ああ、そっか。まだ言っただけだったわけ。

「一人暮らししてたし、料理には自信があるよ。」

「うむ。明久の料理の腕は見習いたいのう。」

「・・・俺にはまだまだ及ばない。」

ムツツリーニはやや辛辣だ。でもさすが秀吉は優しい。君となら僕の新婚生活は薔薇色さ！

「過去形・・・今は一人暮らしじゃないのか。」

うっ・・・鋭い。

下手をすると宗太郎、って時に僕の敵になりそう・・・。

「姉さんが来ててね、彼は煩いんだ。」

「分かる分かる。俺も、兄貴達にやいい思い出が無い。」

へー、宗太郎もお兄さんがいるんだ。それも複数。

「あっ、あのっ、明久君！」

と、ここで姫路さんが急に声を出した。

手には彼女らしいピンク色の風呂敷に包まれた何かが。ふむ、なるほど。

「でさ、宗太郎のお兄さんって？」

「あの、明久君・・・」

「因みにワシも同じ年の姉上がおっての。」

「あの、木下君・・・」

「・・・俺も時々、コネの効く兄弟が欲しくなる。」

「あの、土屋君・・・」

何とか話に夢中になる僕ら。

無視される度に姫路さんの声が涙ぐんでいる。ぐっ・・・、良心が痛むなあ・・・。

でも、ここで死ぬわけにはいかないんだッ！

「お、おい。さっきから姫路が・・・」

宗太郎が姫路さんを指差す。

君はまだ事情を知らないからそんな暢気に出来るんだ！このまま話を続けられたら生き残れるんだから我慢してよ！

「ねー！宗太郎のお兄さんって—————」

「みなさんっ！こっちをみてくださいっ！！」

「「・・・はい。」」

ダメだ。一瞬、姫路さんの目から飛沫が飛んだような気がする。

こうなると僕らに逃げ道は無い。

観念したように僕と秀吉、ムツツリーニが正座で向き合った。俗に言う投降という奴だ。

「お弁当、作ってきたんですけど・・・」

「さすが瑞希ね。ホント、尽くすんだから。」

「へえー！瑞希さんも手作りなんですネ！・・・桃も見習わなきゃ・・・」

彼女が風呂敷を取ると、そこには一見綺麗な弁当が。相当気合を入れてくれたのか、重箱になっている。・・・量的には、全員死ぬな。

だって、姫路さんの弁当は・・・。

「皆さんの分もあるのでよかったですら食べてください！」

「じゃ、俺はこのから揚げいただきー。」

「あっ、宗太郎!？」

見た目で判断して宗太郎はヒョイツとから揚げを取った。咄嗟に僕は大声を上げてしまう。

すると球に宗太郎の目の色が変わり、から揚げを運ぶその手を止めた。

（・・・なあ、明久。）

（え?）

（これ・・・硝酸カリウム入ってるだろ。）

おお、凄いな。臭いか何かは分からないけど危険物であるどころか、毒素をも見抜くとは。

あの観察力といい、宗太郎は特殊な訓練を受けているのかも。因みに何故硝酸カリウムなのかというと、姫路さん的には防腐剤のつもりらしい。

（気づいた?それが姫路さんの実力だよ。）

(・・・どうしよう。)

(ここまで来たら食べるべきじゃ。)

(・・・あの姫路の目を見ても、逃げられるのか?)

キラキラと姫路さんの目は輝いている。

ぐおおおお！だから僕は逃げられないんだ！

(さあ宗太郎。覚悟を決めなよ。)

(・・・)

(泣いても無駄だよ。それにこれなら今朝の異端審問もチャラになるし。)

罪人はいずれは裁かれる運命。

それが遅いか早いかだけの違い。そして今、裁きの時。

ガクガク震える宗太郎。勿論死にたくは無いのだろう。と、その時。

(—————！雄二が戻ってきたのか?)

宗太郎が屋上の出入り口のほうを振り返る。

あ、そっか。すっかり忘れていたけど雄二は飲み物を買っていたんだっけ？

遅くなったのは全員分の飲み物をそろえるのに時間を掛けてしまったからなのだろう。

それにしても僕には聞こえないのに、それを察知で切るなんて・・・
宗太郎。君は何者なんだい？

(・・・風も、吹いた。)

ムツツリーニが人差し指を一舐めし、風向を計る。

ふむ、風は姫路さん達女子の目の前から後ろに掛けて吹いているのか。

瞬間に、僕らは一斉に目配せをした。おお、宗太郎も僕らの考えが分かってくれたらしい。

・・・雄二、悪く思うなよ。

「・・・あつ、俺の写真がー(棒読み)」

ムツツリーニが懷から写真をばら撒いた。

販売用のものなのだろうか、僕とそしていつの間にか取られた僕の写真が。

屈辱だけど今は耐えるしかない！

「あつ、アキの写真!？」

「ええっ!?! 明久くんの写真!?!」

よし! 美波と姫路さんが暗いついてくれた! なぜかは分からないけど!

後は出雲さんの視線を逸らすだけだ。秀吉、頼んだよ!

「俺の桃よ、こっちを見てくれないK a i?」(秀吉)

「ふええええっ!?! お、おおおれおれ俺のおっ!?! / / /」

さすがは演劇部のホープ! 宗太郎本人と何一つ遜色の無い声真似だ

よ！

何故宗太郎の声を選んだのかは分からないけど、女子達の視線が逸れている今がチャンス！

「行くよ！宗太郎！」

「ああ！」

咄嗟に僕らは姫路さんの重箱を抱え込み、屋上の入り口にまで走りこむ。

風よりも、音よりも、光よりも早く待ち伏せるように滑り込んだ。後は、奴がドアを開けるのを待つのみ。

「遅れてすまん。自販機が込んで————ぐおっ！？」

何も知らない雄二はドアを開けるなり、あっという間に宗太郎に羽交い絞めされた。

ふははは！いい様だな雄二！

「ッ！！ 明久、それは————！！！」

「さらばだ雄二！遺灰はオーストラリアの風に流してあげるよ！！」

僕が手に抱えているその正体に感づいたらしい。

だがすでに時遅しというものだ。

開けられた大口に一気に弁当のグザイを流し込む！後は僕らの手で口を動かしてあげる。前にも言ったけど、ご飯はよく噛みましょう。

「な、なんじゃこりゃああああああ！！！」（バタッ）

「姫路さんのジ・ツ・リヨ・ク☆」

絶叫を上げながら雄二は絶命した。

僕はそんな雄二に一瞥をくれてやると、一斉に席に戻る。

そして同時に空になった姫路さんの弁当箱の前で、手を合わせた。

「「「・・・ご馳走様でした。」」「」」

「あ、あれ？もう食べちゃったんですか？」

この間、僅か三秒にも満たない早業だ。

え？普通有り得ないって？ふっ、有り得ない非日常を日常としている僕らを甘く見ないで欲しい。

「センサーも早食いはダメですよ・・・ってどうしてそんな汗だくなんですか？」

「・・・桃。」

「はい？」

「・・・俺は、この学校を選んで多少後悔している。」

密かに、宗太郎と出雲さんはそんな事を話していた。

けれどもその顔にはまあまだ期待の色が残っていてくれた。これから始まるんだ。宗太郎、出雲さんを加えた新しい学園生活が――――。

「・・・・・・・・ところで吉井。」

「あ、霧島さん。何時の間に？」

「雄二・・・・・・・・貰っていい？」

「うん。好きに。」

雄二の死体は、いつの間にか来ていた幼馴染によって闇へと誘われた。

第一話 転校生（後書き）

どうも、テンペストです！え？『流星のロックマン』はどうしたって？

センター試験や大学受験も終わり、ボチボチと更新していくつもりです。

現在週刊少年サンデーに掲載されている『怪体真書0』のキャラ（特に桃）が僕個人として大好きなので出しちゃいました！

今後もドタバタやバカテスト、恋愛なども頑張っていきますので応援やコメントをよろしくお願いします！！！！

バカテスト 二問目 古典

問題

『源氏物語』に登場する光源氏の正妻で、二番目に正妻になった人物を答えなさい。

鳴滝宗太郎の答え

紫の上

先生のコメント

正解です。光源氏は作中、三人の正妻を持つ事になりますが名前が混合しやすいものです。

しかし鳴滝君は本が好きなだけあって、字にも迷いがありませんでした。

出雲桃の答え

葵の上

先生のコメント

惜しいですね。これは光源氏の最初の正妻です。間違える人は大抵、この答えを選んでしまいます。
葵の上は『車争ひ』で出てくる人物なのでよく覚えておきましょう。因みに三番目に正妻になるのは女三の宮という15, 6歳の少女です。

木下秀吉の答え

紅の上

教師のコメント

一か八か色に賭けてみたようですね。残念ながらバチです。

土屋康太の答え

桃の上

教師のコメント

貴方もバチです。

吉井明久の答え

雲の上

教師のコメント

勝手に殺さないで上げてください。

第二話 強化合宿（始まり）

小鳥のさえずりが今日も僕を起こす。

僅かに開けられたカーテンの隙間から、温かい日差しが僕の頬を照らす。

うん、実にいい朝だ。そんないい目覚めの僕の前に。

「あら、アキ君。おはようございます。」

————黒いレオタードに扮した僕の姉こと、吉井玲がそこにいた。

しかも周りには三角木馬や鞭などといったバイオレンスなオプションを転がせて。

「な、何なのさ姉さん！ そのドSにはたまらない格好は！？」

「あらアキ君。お気に召しませんでしたか？」

「お気に召すも何も朝っぱらから姉に調教プレイするなんてどこぞのマニアックなビデオ！？」

つくづくこの姉は僕の予想を垂直に上回っている。

それにお生憎、僕にそんな趣味は無い。雄二とか異端者相手なら殺しても構わないのだが。

「・・・ああ、すみません。姉さんとした事が勘違いをしてしまいました。」

「うん。分かってくれるなら—————」

「アキ君がされる側なんですよね？　姉さんたっぷり可愛がってあげます。」

「行つて来まーす！！」

一瞬で着替えを済ませ、カバンを手に取り、唯一の逃げ道であるドアに急ぐ。
ボタンとか寝癖とか朝ごはんとか気にしてられるかーっ！

「^{ソル}剃」

「うお！？」

急に姉さんが、僕の目の前に現れた。

しかもドアのチェーンまでかけてしまう。クソッ、これじゃ隙を見せてくれてもタイムロスが響いて脱出の難易度が跳ね上がる！

「つていうか何！？　姉さん何のトリック！？」

「アキ君は知らないのですか？　六式なるものを。」

何てこった。僕の姉が実は政府より非協力的な国民の殺害を許可された諜報機関の一員だったとは。

「そしてついでに解説しておくこれは指銃^{シガン}です。（ブンッ）」

「紙絵^{カミエ}！！（バキボキ）」

あ、危なかった。一瞬で体中の間接を外さなければ先程の命を奪う

人差し指を回避できなかっただろう。

美波、いつも体中の関節を外しやすくしてくれてありがとう・・・！

「まあアキ君。鉄塊テツカイの準備なんかしないで姉さんの話を聞いてください。」

「え？ 話って？」

ここで姉さんから殺気が消えた。

どうやら本当に真剣な話らしい。良し、とりあえずいざとなれば窓を割ってでも逃げ切れる逃走ルートを確保しておかねば。

「実は姉さんはこれから1週間仕事でここを開けなければなりません。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アキ君。今の気持ちを、某月の御大将閣下の台詞を借りて表現してみてください。」

「我が世の春がキタ——————！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うわっ！？ ね、姉さん嵐脚ランキヤクで本棚を切断しないで！」

危ない危ない。本日二度目の間接外しての紙絵を使わなければ僕の胴体が綺麗に裂かれていただろう。

この人、道力値はどのくらいあるんだ。

「でも、こんなアキ君のことです。この間遊んだり不純異性交遊をする可能性があります。」

「いやだなー姉さん、僕がそんな姉の期待を裏切るとでも？」

ジト目で睨んでくる姉さん。

くっ、依然疑いの眼が離れない・・・！弟を疑うなんて、悲しい事です。

「とにかく、帰ってきたら姉さんはいませんので。」

「分かったよ。それじゃ—————」

「ただし、アキ君。来週にはテストがありますね？」

僕の言葉は喉の辺りで詰まってしまった。

そう、丁度一週間後にはテストがある。雄二からすれば試召戦争を仕掛ける好機だと思っているから僕も当然正解する気ではいるのだが。

「姉さんはアキ君の成長を母さんに報告しなければならぬ身ですから。」

「・・・で、ボーダーラインは？」

何故、ここでボーダーラインを訊ねるのか？それは姉さんの事だからだ。

大方以前と同じように、僕のテストの出来具合を見るつもりだ。そしてある程度の点数アップを要求してくるはず。

「そうですね。総合科目1100点越えが最低条件です。」

「…………ぬ…………」

これはこれで苦しい。

この点数だと、Eクラスの中堅レベルだ。当然、Fクラスの僕にはキツイ。

けれども以前、僕の名前がアレクサンドロス大王にさえなっていなければこの点数には届いたはず！

「いいよ！ 受けて立とう！」

漢、吉井明久！ここで漢を見せずしていつ見せる！

「分かりました。もし、達成できなければ……………」。

「出来なければ？」

「……姉さんと温かい家庭を築きましょう。」

「行って来ます！」

もうこの姉に付き合っていられない！

僕は形振り構わずに表へと飛び出していった。

☆

「……ってな事があってさ……」

「なるほどのう。お主も大変じゃな。」

「俺も兄貴達に殺されかかっているからな。お前の苦勞は分かる。」

今朝の僕の苦勞をいたわってくれるのは、秀吉と昨日転向してきたばかりの宗太郎だ。

二人とも姉や兄をもっている身からか、うんうんと頷いてくれる。

「何だ明久。また姉に釘刺されたのか？」

「うん。はあ……どうしょ……」

話を聞いていたのか、雄二も着てくれた。

でも正直見栄は張っておいたものの、全く道が見えていない。

自分で言うのもなんだけど僕はバカだ。故に一人でどう勉強すればいいのか分からない。

「全く……しゃーねーな。ま、俺としても丁度いいし。」

「え？ 丁度いいって？」

丁度いいって言うのは、近々試召戦争でも仕掛けるつもりなのだろうか？

でもそれじゃ、ちょっとニュアンスがかみ合わないような気がする。

「実は今度、翔子の家で監禁されることになってな。おっと、まだチェーンソーは早いぞ。」

「アガレロー!!」

おっと、事態を聞きつけたムツツリーニ。

ブォンブォンと唸ってるなあ、血だらけのチェーンソー。ま、B I
○ H A Z A R Dじゃプロと呼ばれた僕には無意味だけどね!

「しかし翔子の奴、この週末に家族と旅行するんだそうだ。」

「旅行? テスト前なのにな?」

「まあそうなんだが・・・アイツなら余裕だし、家族とも中々会えないしな。」

そうだよな。確か聞いた話だと、霧島さんの家族はみんな自由にや
っているらしい。

そんな家族で水入らずの旅行、確かにテストを押しつけてでも行き
たいものだ。

霧島さんの成績だからこそその成せる業、ってところかな?

「んむ? 普通は雄二も連れて行かれそうだがの。」

「そこなんだ。 まあお前らの監督もしなきゃなんないって言って
勘弁願った。」

コイツ、霧島さんの呪縛から解き放たれるために試召戦争には熱を
入れている。

今度の週末もてんで厳しい事に・・・。

でもまだ宗太郎は解せないらしく、腕を組んで考えていた。

「おいおい、それで何が丁度いいってんだ？」

「そこなんだ宗太郎。翔子が出した交換条件は————何だと思おう？」

「ブサイク雄二の整形！」

「パーの正しい使い方を教えてやる。（ズバツ）」

危ない危ない。

とっさに畳を捲り挙げて盾にしていなかったら、その手刀で綺麗に真っ二つだった。

「全く・・・決まってるんだろ。翔子の家で、留守番するって事だ。」

「えっ！？ 霧島さんの家を任せちゃったの！？」

「ああ。アイツの家族が認めたときは気が狂ったが、ピンチはチャンスだぜ・・・！」

ああ。なるほど、そういう事なのか。

霧島さんの家はどちらかと言えば裕福だ。そんな彼女の家はとてつもなく広い。

僕らも一度、霧島さんの家で泊り込みの勉強会をした事があった。

「つまりそこで勉強会を開こうって言うんだね？」

「その通りだ。翔子も納得したし、勉強道具や仮想テストなどの貸し借りも認めてくれている。」

霧島さんは学年主席の実力者。

そんな彼女の頭脳は、何も天賦の才では無かっただろう。そのために、様々な努力や道具を使ったに違いない。

彼女の愛用する勉強道具を使えば、一段とレベルの高い学習が行えるかもしれない。

「この週末、俺がお前らを鍛えてやる!!」

「本音は？」

「その謝礼として翔子の部屋から婚姻届奪回に協力して欲しい。つかしなきゃクロス。」

ここで視線を暗くし、パキポキと指を鳴らす雄二。
相変わらず物の頼み方を知らない男め!!

「俺をロクデナシと思うのは勝手だがな明久。」

「ハン！ 何？ 今更涙の謝罪会见!？」

「俺が勉強を教えずに、姉が定めたボーダーラインを超えられるのか？」

「雄二！ 僕で良ければ力を貸すよゲヘヘヘ。」

友達の頼みを踏みにじる程、僕は悪魔超人じゃない。

「よし、明久は陥落。ムッツリーニ。」

「・・・今、朝の売り上げ計算中。」

「勿論、姫路達も誘う予定だ。」

「・・・計算完了。俺も行く。」

おお、この勉強会の未来にエロスを感じ取ったか。
普段では僕以上にバカなこの男も、エロが絡むと突然凄くなる。

「面白そうじゃな。ワシも構わぬかの？」

「勿論だ秀吉。宗太郎はこの週末空いてるか？」

「ああ。俺もいいのか？」

「当たり前だ。出来れば出雲にも声を掛けて欲しい。」

どうやらいつものメンバー＋宗太郎と出雲さんで合宿、か。
ここら辺で、この期待の戦力である二人も一緒に強化という事か。

「何々？ 何の話？」

「センサー、どうしたんですか？ そんな楽しそうな顔をして。」

「明久君、何の話をしていたんですか？」

ここで飛んで火にいる何とやら。姫路さん達が駆けつけてくれた。
そこで雄二がいつものように説明する。

「—————ってなワケで泊り込みの合宿をしようと思うんだが。」

「翔子ちゃんの家で、ですか……。」

「そうねー。ウチらも拒否する理由はないんだけど……。」

「行き辛い、っていうのがありますね……。」

ああ。なるほど。

良識を持っている三人だからこそ、か。確かに友達とは言え、他人の家で堂々と、しかも本人抜きで宿泊とは少々気が引けるかもしれない。というより何か、どこか恥ずかしがっているように見えるのは気のせいかな？

「あー。いいのか、お前ら？」

「何がですか？」

雄二が何か、挑発のような台詞を投げかける。

ごく自然に投げられた言葉に、純粋な出雲さんはあっという間に乗せられた。まあ、それは他の二人才同じなんだけどね。

「……………秀吉が来て、お前らの男を惑わせるんだぜ？」

「「「行きます！！！」」」

うお！？何だ、この食いつきの良さは！？

雄二の言葉は小声だから聞こえなかったんだけど、確実にそれが引き金だ。

「・・・・・・・・・・」

「あれ？　どうしたの秀吉？」

「いや、何故か釈然としない気持ちになつての。」

ふーん。僕にはよく分からないけど。

あ、もしかしてこれが所謂“女の勘”って奴なのかな？

「・・・・・・・・ところでさ、ムツツリーニ。」

「・・・・・・・・どうした宗太郎。」

「売り上げがどうのこうの言つて眺めている写真は何だ？」

あ、そっか。宗太郎は知らないんだっけ？

ムツツリーニが経営する「ムツツリ商会」なるものを。

見せるのが手っ取り早いと感じたのか、ムツツリーニは眺めていた写真の一つを渡した。

「・・・・・・・・一見は百聞にしかず。」

「百聞は一見にしかずだって・・・・・・・・ってふおおおおっ!？」

おお。さすがムツツリーニの撮る写真。

あれはこの間のプールでの写真か。美波のセパレートだけど、それすらも色っぽく取れているから不思議だ。

見事宗太郎ですら釘付けにしている。

「・・・一枚300円。」

「これ一枚300円だと!？」

「・・・因みにアキちゃんになると500円。 秀吉のものは2000円。」

何故僕のが引き合いに出されて、しかも秀吉の四倍になっているかが気になるどころだ。

「明久。 四分の一な。」

「わ、分かってるよ!」

つい口が滑ったっていうアレね。

因みに宗太郎は即決して、財布の中のお金を使って全て買い漁っていた。でも直後に凄い剣幕をした出雲さんによって全て没収された。

「貴様ら! HRを始めるぞ!」

ちえっ、鉄人の登場で楽しい朝の時間も此処までか。

そして何故だろうか、鉄人から凄まじい殺気が。

「さて、抜き打ち持ち物検査を始める。」

『『『ンだとおっ!?!?』』』

うお!?!?ここで持ち物検査とは悪質な!!

でも僕は今朝姉さんに振り回されたおかげで、ゲーム機とかは持って来っていないからセーフだ。

「吉井。 脱げ。」

「先生それ傍から聞くと変態発言に聞こえませんかこのアイアンクローをやめてえっ!!」

からかおうとしたただけなのにこの仕打ち。アンタは鬼か! いや、鬼だ!

こうして僕はジャージに着替えさせられたワケだけど、生憎持ったこれるはずがないのさ!

「・・・珍しく持ってきていないようだな。 今後も続けるように。」

「そうですよ。 今日を持ってくる暇が無かったんですから。」

「前言を撤回する。 今後もお前の監視はより一層厳しくしてやる。」

あれ? 何か地雷を踏んだような?

「次は土屋だ。」

「……………(フツ)」

フツ、って微笑むけどいいのムツツリーニ!?

君さっき写真を眺めていたよね!? 取り上げられないの!?

でも鉄人が辺りを漁るに漁っても、それらしいものは出てこない。

「特にはないな。 宜しい。」

あの鉄人の事だ。手を抜くはずが無い。

それならば・・・まさかさつき宗太郎に売りつけた写真が最後だったのか！

「・・・俺を甘く見るな。」

凄いやムツツリーニ！鉄人の抜き打ち持ち物検査を見抜いただけじゃなく、それを利用して宗太郎に危険物処理を任せた挙句利益を上げるなんて！

君こそ平成のヒトラーを名乗るに相応しいよ！

さてさて、鉄人は勢いで秀吉の持ち物を検査し、次は雄二の番だ。

「次は坂本、お前だ。」

「ふん。 あるはずがねえ。」

「服を脱いで畳も捲れ。」

「ちくしょお—————っっ！！！！」

あ、畳の裏に隠してあったんだね。 エロほん 聖典。

あっさりとバレて、没収されてしまった。事前に知らされていたらアイツも何らかの対処は出来たはずなんだけども・・・。

「さて、次は鳴滝。 お前だ。」

「そんなに怪しいものなんて—————。」

そう言いながら、ちよつと不機嫌でカバンを差し出した。
さっき買い上げた写真は出雲さんに処分されたんだっけ？ま、宗太郎の持ち物はちよつと興味があるけどどうなんだろう？

「・・・鳴滝、これは何だ？」

「へ？ 『猫八伝』 っていう小説ツスけど。」

「没収だ。」

「何で！？ 普通の小説じゃん！！」

「小説を学校に持ってくる必要性など無い。」

そう、何故かこの学校は図書室にある本以外は全て没収対象となっている。

例え川端康成が書いた物であつてもだ。

こればかりは厳しすぎると思うけどなあ。

「嫌だ嫌だあっ！！ 猫八伝を持っていくなあーっ！！」

「駄々をこねるな。それとも力ずくで守って見せるか？」

そう言えば宗太郎って本が大好きなんだっけ？

大好きな本を没収されまいと、必死に抵抗している。一方の鉄人は指をパキポキと鳴らして脅しに掛かる。

悔しいけど宗太郎、諦めるんだ！

「よし！！ 絶対に守ってみせる！！」

「センサー！ やめてー！！」

うおおおい！？ あろう事か鉄人に宣戦布告しちゃったよ！？
もしかしたら雄二やムツリーニのように、喧嘩や隠密能力に長けているのかもしれないけど鉄人はそれをも上回る地球外生命体なんだよ！？

もう出雲さんに至っては心配で泣いちゃってるし！

「鳴滝————落ちて後悔するがいいッ！」

落とす気！？ 教育者とは思えぬ動詞が飛び出したよ！？
けれども宗太郎はどこか微笑んでいた。

「この程度————見切れるっ！！」

「何っ！？」

何と宗太郎は鉄人が伸ばした腕を、まるで受け流すかのようににした。

おお！ 凄い！ ムツリーニでもあんな動きは出来ないよ！

「・・・なるほど、ここで“鳴滝”の力を使うのか・・・」

へ？ “鳴滝の力”って何？

宗太郎って実は有名な剣術道場の跡取りとかそういうのかな？

「だが、俺の力もまだまだこんなものでは————」

「奥義、光遁！」

ここで宗太郎の姿が消えた。そして次の瞬間には鉄人の背後を取っている。

え？何！？どういう事！？

「はあっ！」

「うぐっ！？」

そのまま手刀を鉄人の延髄に吸い込ませた。

衝撃が衝撃だけに、鉄人もドサリと倒れこむ。こ、これってつまり――。

『す、すげえっ！ 鳴滝の奴、あの鉄人を倒しやがった！』

『本当だ！ これからはもう、鳴滝様の時代だな！』

クラス中が、歓喜に溢れ出した。

そうだよ！あの鉄人を打ち倒しちゃったんだよ！？凄すぎる！！

「センサー！」

「桃！？ どうしたそんな涙目で！？」

「だってえ……だってえ……」

おや？出雲さんが涙目で宗太郎に駆け寄る。

まるでヒロインが主人公の帰還を祝っているかのようだ。

これはさすがに妬みに値するシチュエーションではあるが、誰もが宗太郎の実力に戦いたのか手出しできないでいる。

「本当によくやったな、鳴滝。」

「だろう鉄人！ 俺、強いからよ！」

鉄人も、宗太郎の肩に手を置いて祝福する。

あの鉄人にすら祝福されるなんて、本当に――――あれ？

「ちよちよちよちよ！？ で鉄人がここに！？」

そうだよ！だって、鉄人は今でも宗太郎の目の前に倒れてい――――

「鳴滝。 貴様にいい事を教えてやろう。」

そう言って鉄人は、自身の倒れた姿を指差す。

途端に倒れていた鉄人は、まるで高速移動したかのように消えてしまった。

「あれは残像だ。」

ああ、そうだよね。鉄人相手だともうスカウターが壊れちゃうもんね。

☆

「・・・・・・うう・・・・・・猫八伝エ・・・・・・」

「センサーしっかりしてくださいっ。　　後で桃が買ってあげますから。」

今日の授業は午前中授業。

僕らはこうやって日も暮れぬうちに帰路についているのだが、この通り宗太郎は泣いていた。

別にあの後、鉄人にフルボッコされたからではない。本を取り上げられてしまったからだ。

出雲さんの優しい慰めで、何とかある程度の元氣は取り戻したようだ。

「やれやれ、だな。」

「ま、仕方ないよ。　　寧ろ褒め称えるべきだよ。」

「そうだな。　　あの鉄人と一瞬とは言え互角だったもんな。」

珍しく雄二も同情している。

無理もない、あれだけの逆転劇を見せられたら誰だってそうなるだろう。

「で坂本。何時くらいに集合するのよ？」

「そうだな。姫路、今何時だ？」

「えーと、12時30分ですね。」

「なら準備も親の説得とかもあるだろうから、3時までには来てくれ。」

3時か。これなら昼ごはんも食べれて、準備も楽々出来る。早すぎず遅すぎず、いい時間帯だ。

「無理だった場合は電話をくれ。ああ、それと明久。」

「え？ 何？」

「宗太郎と出雲は翔子の家を知らないから案内してやれ。」

「ん。了解。」

確かにそうだ。だとすれば僕が案内してあげるのは筋だろう。一応何処で待ち合わせるか聞いておかなくちゃ。

「ねえ、二人は何処に住んでるの？ 近いところで待ち合わせしよう。」

「そうだな。メゾン・ド・ホイホイって知ってるか？」

「うん。知ってる知ってる————って僕の住んでるマンションじゃないか！」

何と家は僕の住んでいるマンションだったらしい。
気がつかなかったのは階層が違うからなのだろう。

「ひょっとして————出雲さんも？」

「え？ あ、はい。」

「・・・まさか————同棲とか？」

「してませんっ！・・・その、いずれはしたいんですけど・・・」

それならば宜しい。もしそうなら、ムツツリーニのスタンガンが火を噴くところだった。

僕も友達を殺すのは忍びないしね！

出雲さんの最後の台詞がやや気になるが、今は聞こえなかった事にしておこう。

「全くお主らは・・・それじゃ、ワシは一足先に分かれるとしようかの。」

「ウチもここで一旦別れるね。」

「おう、秀吉に島田。 来たら古典みっちり叩き込んでやるからな。」

別れ際の雄二の台詞に、二人は苦い顔をして見せた。
美波に秀吉も、古典が大の苦手だからなあ。

「・・・俺もここで失礼する。 準備は怠らない」

「あ、私ですね。」

今度はムツツリーニと姫路さんもか。

そしてムツツリーニ、今回の強化合宿では君のその“準備”が最も大事なんだっ・・・！

絶対に最高の準備を、頼む！

「へえ、土屋さんもやる気なんですね。」

出雲さん、ムツツリーニのやる気の原因は貴方を含めた女子四人です。

こうしてあつという間に残りは僕ら四人となってしまった。けれども此処まで来ると次に分かれるのは他でもない、雄二だ。

「おし。 んじゃ遅れんなよ。」

「雄二こそ遅れないでよね。」

「先に集合場所にいるのにどうやって遅れるというんだ。」

しまった。間違えた。

呆れつつ、雄二も分かれ道で別方向を歩いていってしまう。さて、残るは僕らの住むマンションだ。

「で明久。 その雄二の家まではどのくらい掛かるんだ？」

「霧島さんの家だよ。 まあ、歩いて30分くらいかな？」

「それじゃ集合は2時にしましょう！」

出雲さんが集合時間を提案してくれた。

うん。それなら十分間に合うし、早すぎず遅すぎずいい時間帯だ。僕も気兼ねせず ゆっくり準備が出来る。

「僕はいいよ。 宗太郎は？」

「ああ。 俺はどうせ本しかもって行かないだろうから。」

「もう、センサーったら！ 皆でお勉強しに行くんですよ!？」

「一番勉強しなきゃなんねーのはお前だろうが。」

いや、Fクラスにいる以上君も頑張らないといけないんだけどね。

「それじゃ二人も、また後で。」

「おう。」

「はい。」

階が違うため、僕ら三人はそれぞれバラバラになった。

さて、早いところ支度しようっと。

第二話 強化合宿 〽始まり〽 (後書き)

どうも、テンペストです。

さて、冒頭の明久と玲のやり取りで六式やら剃やら分からない方。

是非ONE PIECEをお読みください。特に33巻から44巻辺りを。

それにしても宗太郎、原作でも凄い強さですよ。だが鉄人はもつと化け物。

どんだんだらゴンボールみたいに力のインフレが進まなければいいのですが・・・。

ではでは、感想お待ちしております!!!

バカテスト 三問目 歴史

問題

ルイ16世の王妃である（A）は民衆に対する有名な発言である「B」ということを言ってしまったために1793年、フランス革命にて処刑された。

文中のAには人名を、Bには台詞を書いて答えなさい。

姫路瑞希の答え

A マリーアントワネット

B パンが無いならお菓子を食べればいいのに。

教師のコメント

正解です。Bの発言に対しては、民衆に対する思いやりの無さとマリーアントワネットの傲慢さが窺える台詞として有名です。ですが最近ではこの発言は彼女自身のものではないというのが定説となってきたおり、先生も出さなにか悩みました。様々な歴史が覆される中、我々教師陣も生徒にどのように教えていけばいいのか困惑しています。

勿論姫路さんの回答で正解です。

土屋康太の答え

A エリザベス女王

教師のコメント

その人はイギリス国籍です。

出雲桃の答え

B い、今すぐお助けします！

教師のコメント

民衆を見下してください。

坂本雄二の答え

B 死ねばいいのに。

教師のコメント

見下しすぎです。

吉井明久の答え

A 吉井明久

B パンが無いなら割り箸を食べればいいのに。

教師のコメント

貴方の行く末が心配です。

第三話 強化合宿（到着）

P M 1..49――――。

「えーと。ONE PIECEでしょ、P S 3でしょ、P S P
でしょ・・・」

画面前の君。僕が何をしているのか分かるかい？

勿論霧島さんの家で宿泊する事になってるんだ！当然、遊び道具は
不可欠！

え？勉強？何それ美味しいの？

「つと、姉さんとも約束しちゃったし無視は出来ないよね。」

とは言え、名目上は『強化合宿』。しかも総合科目で1100点以
上取らなかつたら姉さんと温かく、寒い家庭を築いてしまう事にな
る。

一応全科目の教材を持っていくか。後忘れちゃならないのが白金の
腕輪に、財布と携帯電話。着替えも用意したし、これでよし。

「それじゃ、ちょっと早いけどロビーに行くかな。」

今、1..50になったところだ。

正直まだ早いけど、だからといって遅れたら宗太郎達にも悪いし。
それに10分少々なんてくたびれる程でもない。

キッチンと鍵を掛けて、荷物を持ち、ロビーに向かう。するとそこに
はもう宗太郎と出雲さんが待っていた。

「あれ？ ひょっとして僕待たせちゃった？」

「いいえ！ 桃達も楽しみすぎてついさっき来たところなんです。」

「ああ。だからまあ、気にしないでくれ。」

ああよかった。余りにも長い間待たせるって言うのは申し訳ないし。っていうかそれにしても……。

「い、出雲さんその衣装凄く可愛いね！」

「えっ！？ そ、そうですか！？」

な、何だ。物凄く嬉しそうだが。

出雲さんの髪形こそ変わらないが、って言うか私服も凄く可愛い！しかもミニスカ！？ムッツリーニじゃないけど膝上20センチはあるぞ……！

「……って言うかセンサーはどうして桃に無関心なんでしょうか……。」

「ん？ 桃、何か言ったか？」

「いーえっ！」

あれ？出雲さん急に不機嫌になっちゃった。一体どうしたんだろ？何か見る限りでは、宗太郎に対して不満がありそうなんだけど……。

（宗太郎、何を言ったのさ？）

（俺は何も言っていないが？）

ふーん。何も言っていないのか。

だとしたら余計に出雲さんが怒っている理由がよく分からない。
女の子って、複雑なんだなあ……。

「さ！ 行きましょう！」

「「は、はい！」」

うお！？ 出雲さんの気迫が僕らを凌駕している！

も、物凄く不機嫌じゃないか……！

僕が先頭で彼らを引き連れている間も、尚も続くこの空気。ここは
僕が和らげねば……！

「あ、あのさあつ！ 鉄人の言ってた“鳴滝の力”って何かなあつ
！？」

「……………」

あれ？ 気のせいか殺気よりもっと不穏な空気が流れた。

ひよっとして僕またまた地雷踏んじやった！？

ど、どうしようどうしようどうしよう！？ と、とにかく謝らな
いと……！

「ご、ごめんなさい！！ 言いたくなかったら————」

「いや、これから一緒に過ごす仲間だ。言わないわけには……
いかない。」

そういつて、宗太郎は凄く真剣で、でも悲しい視線を見せた。出雲さんも相当心配なのか、両手を合わせて見守っている。

うう………。どうして僕ってこう、人の嫌な記憶を抉り出しちゃうんだろ……。

「実はさ、俺……暗殺家の出身なんだ。」

「あ、暗殺……？」

「そうだ。しかも金さえ払えば誰だって殺すって言うサイテーな家だ。」

その口調は、まるで自嘲するかのようなものだった。

更にそのまま視線を移した手は、まるで汚れているようなものを見るかのようにだった。

「それでさ、騙されていたとはいえ友達殺しちゃったんだよ。」

「……………」

「一応、法律上でも無罪って事にはなったが……俺の手の“汚れ”は消えない。」

まるで、憎たらしいものを見るような視線で宗太郎は自分の手を見詰めている。

刃物が今彼の手に合ったら、それこそ自分の手を切り落としてしまいかねないほどに。

「……俺もさ、最低な人間なんだよ。」

「だから・・・医者に？」

「そうさ。せめてもの罪滅ぼしにつて。」

「・・・・・・・・・・。」

「ま、この通り俺は人の命を奪った事のある人殺しなんだ。」

だから、だったのか。この年で医者志望なんて。

きっと僕なんかじゃ、宗太郎みたいな凄い考えも壮大な決意も出来ないだろう。

出雲さんも、彼の苦しみを分かっているからそばについているんだ。此処まで来ると、宗太郎の悲しみを僕は知る事がないのかもしれない。

でも、一つだけ分かる事があった。

「だからってさ、僕らの知る宗太郎が変わるわけじゃないでしょ。」

「え？」

「そりゃ、昨日知り合ったばかりだけどさ。こうして友達になっただけなんだから。」

宗太郎は友達を殺しちゃったって言うけど、事実目の前にいる宗太郎は優しい。

それは僕の日を見てでも分かる。だから、僕達全員友達になれたんだ。

それに悪いのは、宗太郎じゃないんだから。

「ねえ、出雲さん。宗太郎の手ってさ、汚れてる？」

「そんな事無いですっ!!」

僕の発言に対して、すぐに出雲さんが宗太郎の手を握ってみせる。そして広げられた掌は一切汚れていなかった。

いきなり手を握られた事に、宗太郎は少し顔を赤くしているが出雲さんの表情は真剣だ。

「桃は知っています！ センセーは優しいって！ この手で、桃を守ってくれたって！」

「……桃……。」

「だから、桃はセンセーについていこうと決めたんです！」

桃さんの優しい手は、一切のためらい無く宗太郎の手を包み込んでいる。

こんな優しい女の子にこれだけ信頼されているんだ。悪い奴であるはずが無い。

そりゃ僕はエロ本も読むし、バカだし、学校でも問題行動ばかり起こしている。でも、友達を見る目だけは絶対に狂っていない。

「ね？ これだけ信頼されておいて、それでも自分が人殺しなんて自嘲できる？」

「……はあーあ。出来なくなっちゃったなー。」

どうやら、過去の柵しがらみを捨て切れたようだ。

当然全部とまでは行かないけれども、見せてくれた笑顔は本当に軽そうだった。

「じゃ、そういう事で改めてよろしく！ 宗太郎！」

「・・・ああ！」

僕は手を伸ばした。そして宗太郎はそれを握ってくれる。

うん、本当に温かい手だ。宗太郎は、本当の意味で友達になれる。僕はそう確信した。

「あ、それとね。」

「ん？」

「さっき出雲さんに手を握ってもらえた事については別件扱いです。」

「ちょ待て！！ アレは・・・！！！！」

「挙句出雲さんに信頼されるなど言語道断。」

「いーっ！？だ、だからあっ！！！！」

「とにかく、詳しい事情は週明けの異端審問会にて。 お楽しみに。」

「チクシヨオオオオ—————っ！！ そんなん出来るかあ
ーっ！！！！」

そんなこんなで、とうとう僕らは霧島さんの家に到着した。

☆

ピンポーン ガチャッ

「おっ、みんな来たか。」

「・・・待ってた。」

出迎えたのは当然のように雄二と、ムツツリーニだった。
二人以外はまだ誰も来ていないらしい。

「ま、とりあえず上がってくれ。」

「「「お邪魔します。」」」

靴をそろえて靴箱へ。

玄関に置かれてあったお客彷徨うスリッパに履き替えて、廊下をとことこ歩く。

僕は以前見たことあるから、懐かしいに似た感じだな。

宗太郎と出雲さんは始めてみる高級住宅に、興味津々だ。

「なあ、あの本が沢山ある部屋は何だ！？ 見てえ！！」

「確か書斎だったな。 翔子から許可は貰っているから、後で入っ
ていいぞ。」

「あちらのスクリーンがあるお部屋は何ですか？」

「シアタールームらしい。 勉強終わったらDVDでも見ようぜ。」

「「あっちの鉄格子に拷問器具が並べられている部屋は？」」

「・・・・・・・・俺の・・・・・・・・部屋・・・・・・・・」

以前来た時より、何かパワーアップしている。

苦笑いで廊下を渡っていると、何やら大きな部屋に出た。

確か、あっちで男子用、こっちで女子用の部屋に分けたよね？あの
時は霧島さんの部屋が女子部屋だったけど、今日は霧島さんがいな
いから別の部屋になったみたいだ。

「んじゃこっちが女子の部屋。 出雲、先入って荷物でも広げてお
いてくれ。」

「はい。」

出雲さんは「お先に失礼しますね」と言って部屋に入った。

くううつ・・・あの部屋の向こうに隠された神秘を暴きたい！

でも、まずは荷物をどうにかしなきゃ。PS3とか持ってきている

から、肩に食い込むんだよなあ。

「雄二、僕らは以前と同じ部屋？」

「ああ。宗太郎一人増えても全然問題ないスペースだからな。」

「・・・秀吉は別室。」

また秀吉は別室なのか。可哀相に。

「そういやムツツリーニ。随分早いね。」

「早いも何も、1時20分くらいに来たんだぞ。コイツ。」

「へー。随分早えなー。」

僕も宗太郎も驚きの速さに感心している。

確かに時間にルーズな奴ではないけれども。でもあんまり早すぎて迷惑になったりしてないのかな？

「・・・明久、雄二、宗太郎。」

「「「?」」」

「・・・俺はこれより、防御を捨てる。防御など、愚の骨頂・・・！」

そう言ってムツツリーニは何かを取り出した。

あれは・・・確か『逆転○判』でも出てきた盗撮用のピンホールカメラ！？

オマケにタイマーやトランスミッターまで完備!?

「ムツツリーニ! お前まさか・・・!」

「それらを仕掛けるために来訪を早めたのか!?!」

「・・・既に全室にセット完了。玄関や先程の部屋は勿論の事、風呂やキッチン、果てはから全渡り廊下にまでセット完了・・・!」

うおおおい!?! コイツ、本気だ!

雄二と宗太郎も、この男のやる気を感じ取ったのか生唾をゴクリと飲み込んでいる。

でもいいの!?! ただでさえ、パンチラで出血余裕なムツツリーニ。そんな事したら出血多量で死んじゃうよ!?!

「・・・大丈夫だ。」

「え? 何で?」

するとムツツリーニは、凄く優しい眼差しで僕の肩に手を置いた。

「・・・俺が死んでも代わりがいる。」

あ、生還は諦めてるんだね。

ほらそんなかつこいい事を言うから雄二や宗太郎も涙を飲んじゃったじゃないか。

「・・・それに、今回は絶対に失敗は許されない。」

「どうして?」

「・・・カメラなどの機材にどれだけ費やした事か・・・！」

ああ、そっか。全室仕掛けた、何て言ってももんね。

女性陣が何処に行ってもいいように、どこでチャンスが訪れてもいいようにとの事なのだろう。

っていうかコイツ、今回のためだけにどれだけの金を費やしたんだ・・・？

「・・・それにバレれば即、刑事さんと一緒にカツ丼を食べる羽目になる・・・」

「まあ、ムツツリーニはバレたら一巻の終わりの綱渡り人生だからな。」

盗撮なんてバレたら、下手すりゃ退学ものだしね。

僕らもそんなムツツリーニ（の写真）に頼っているのだけれど。

「今までよく渡ってきたな。その綱渡り・・・」

「・・・俺はこれからも渡り続ける。そして・・・」

「そして？」

「・・・今日、俺は転落死する。」

本気で生還を諦めているようだ。

それでも一切臆していないその様に、宗太郎も感動で打ち震えていた。

ムツツリーニ・・・君は今、最高に輝いている！

「つと、着いたぞ。」

「よいしょ・・・と。」

ここで僕らの寝室に到着した。

置かれているベッドの一つに僕の荷物をボスンと置いておく。
キッチンと掃除してあるのか、それなりの衝撃だったのに埃一つ舞わない。

「・・・さて、これから全員協力してもらうぞ。」

「協力・・・？ ああ、雄二の天国行きのチケット？」

「そう。 マイナス面の意味を含んだチケットだ。」

無論、この場合のチケットは婚姻届を指す。

確かアレは霧島さんの部屋の防弾ガラスの中にしまわれていたっけ？

「でもよ、どうするんだ？ 相手のガード結構厳しいんだろ？」

「そのためにお前らの力が必要なんだ！」

宗太郎の乗り気しなさそうな顔でも、鬼気迫る表情で詰め寄る雄二。
やれやれ。ここで断ったらジャーマンスープレックスだろう。
仕方がない。これで、以前の清涼祭の借りを返すとしますか。

「んじゃ、女子達がまだ来ていないから行くぞ。」

雄二に引き連れられて、僕らは霧島さんの部屋へ向かった。

そしてついた先には。

「・・・・・・・・何なの。この鍵の量。」

扉には鍵穴という鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵鍵。

扉全体が鍵で出来てると行っても過言ではない。

ってかここまで防犯対策する必要あるの！？霧島さん、雄二に家を預けても全然信用してないよね！？

「クソ・・・ッ！翔子の奴、だから俺の条件を飲みやがったのか！」

「あ、霧島さんは雄二の狙いに気がついてたんだね。」

つくづく霧島さんが絡むと頭が回らないなあ。

って言うか一言に鍵と行っても普通の鍵は勿論の事、何やら指紋、声紋認証システムや暗証番号を要求するもの、果ては何か「封」とかかれたお札まで。

・・・・霧島さん、どうやって部屋に入ってるんだろ？

「ムツツリーニ、何とかならないか？」

「・・・・・・・・30秒くれ。」

うおお！？この鍵穴の数に対しても30秒で挑む気か！？

一向に揺るがない視線から、本気である事が窺える。

そしてムツツリーニは、懷に手を伸ばした。まさかキー○レード！？伝説のキーブレー○を取り出すつもりなのか！？

「・・・・・・・・（クチャクチャ）」

「って何ガムを噛んでるのさ（クチャクチャ）やっぱりガムはミン
トだね。」

「明久テメエ！ ガム一枚で買収されんな！」

いけないいけない。いつの間にかガムを噛まされていた。

「・・・違う。これは、こう使う。」

「ん？ ・・・何だそれ。 火薬の臭いがするんだが・・・。」

ムツツリーニは、更に懷から何か球状のものを取り出す。

そして噛み終わったガムを口から吐き出してそれに貼り付け、ドア
に接着。

でも宗太郎が言うにはそれからは火薬の臭いがするらしい。・・・
おい、ちよつと待て。

「む、ムツツリーニ！？」

「・・・伏せろ。」

「この場で伏せたら全員死ぬだろ！？ 総員物陰に非難！！！」

「「了解っ！！」」

慌てて曲がり角に非難する僕ら。

と、丁度その時ドアの方から爆音と爆風が巻き起こった。

小規模の焦げ臭い臭いと衝撃が収まった後、曲がり角から顔を覗か
せれば見事ドアだけが木っ端微塵となっていた。

「す、凄い！ ドアだけを破壊するように計算された火薬の量とい
い爆弾の位置といい・・・」

「ホントすげえぜムツツリーニ！ これなら防弾ガラスでも怖くね
え！」

宗太郎や雄二にも褒め称えられている。

対するムツツリーニも照れくさそうにしていた。

・・・でも、爆弾の作り方なんてコイツ、どこで教わったんだ・・・
？

「・・・早く用件を済ませる。」

「おっとそうだったな。 婚姻届は・・・あった！」

部屋に入るなり、確かに雄二の捜し求めるものはあった。

それは、たった一枚の紙切れ。

それが—————水晶のような八面体に覆われていた。

「ちよちよちよ！？ 何なのこのRPGみたいな封印の仕方は！？」

「・・・これはさすがに、爆弾でも無理。」

「翔子の奴・・・ここまでするか普通！？」

手に触れても、相当な硬さだ。

一枚一枚が、どうやらダイヤモンドのように固いらしい。

これならば、ムツツリーニの技術でも不可能だろう。

「・・・なあ、思ったんだけど。」

「? どうしたの宗太郎?」

「こーゆーのってさ、普通後から取り出すモンだろ?」

「そりゃそうだよね・・・だから?」

「だから、絶対に取り出す方法があるんじゃないの?」

ああ!なるほど!絶対に取り出せないって事は無いだろう。
あの霧島さんのことだから、うっかりって事もなさそうだし。

「多分、そのための手がかりはこの部屋ん中じゃねーかな?」

「可能性は高いな・・・よし、調べるぞ!」

宗太郎の意見に推されて、雄二が辺りを根気よく調べ始めた。
っていうかこういうのは普通この男が思いつかなければならないはずなのに。

それに比べて宗太郎は本当に凄い。

「明久! セル第二形態みてえな顔してねえで貴様もさっさと探せ!」

「言っちゃったね雄二!? 今僕の顔を最も例えてはならない比喻で言ったね!?」

言うに事欠いてなんて事を言い出すんだこの男!せめて第三形態ならまだ許してやれたものを!

でも、そんな間にも宗太郎やムツリーニも辺りの探索を始めている。

ちえっ。仕方ない、僕も周りの空気にあわせて探すか。

ガサガサ・・・ゴソゴソ・・・

「雄二ー。そっち何かあったー？」

「いや。特には無いな。」

「そっか。」

「あるのは精々、使い古された包丁の類だけだ。」

「どうして台所でもないのにそんな刃物が数多くあるのか不思議だね。」

ガサガサ・・・ゴソゴソ・・・

「おおっ！ 凄いものがあつたぞ！」

「何を見つけたのさ宗太郎？」

「今や絶版となった『黒魔術入門』に『〇〇な薬品の調合法』なんてのだ！」

「とりあえず宗太郎が本が大好きなことで、霧島さんが心配なのは分かったよ。」

ガサガサ・・・ゴソゴソ・・・

「ムツツリーニ。そっちは」

「・・・っ！（ブシャアアッ）」

「下着を見つけたんだねハアハアハア」

ガサガサ・・・ゴソゴソ・・・

「・・・おっ、何か鍵っぱいを見つけたぞ。」

「でかした宗太郎!!」

部屋の隅っこで、宗太郎の声が聞こえた。

どうやらカーペットを捲ったらしい。

そこには確かに鍵らしきものがある。ひょっとしたら、この鍵である水晶型の箱を開けるかもしれない。

「凄いよ宗太郎! 女の子の部屋でも簡単に物色して見せるなんて!!」

「変に誤解を招きかねないがとうな。」

いやいや、本当に凄い。こういう裏工作ならムツツリーニが光るところなのに。

いずれにせよ、これで僕らの任務は完了。

早いところ済ませて――――――殺気!?

「アーキー・・・アンタら、何してんのオ・・・?」

「ダメデスネエ、明久君。 女ノ子ノ部屋ヲ覗クドコロカ物色スル
ナンテ・・・。」

「・・・センサー？ こんな事を桃の目の前でしていいと思います
かー？」

入り口のほうを振り返ると、そこには殺気を漲らせるものが三人立
っていた。

いつの間にか来たのであろう、美波、姫路さん、そして出雲さん。
いずれにしてもこの力、魔人ブウを蘇らせる事ぐらい簡単じゃない
んだろうか。

「あれれ？ ムツツリーニ君もダメだねえ、こういうの。」

「・・・何故、工藤愛子までもがここに・・・っ！」

「ボク？ ボクも姫路さんや坂本君に誘われたからさっ（チラッ）」

「・・・卑怯なっ・・・！（ブシュウウウウッ）」

「女の子の部屋を勝手に覗く悪い子にはお仕置きだよっ☆（ピラッ）」

「・・・世界は、俺を試そうとしているのか・・・（ブバアアアア
アアアアッ）」

どうやらついでに誘われたらしい、工藤さんがパンチラやら胸チラ
やらを行っていた。

それだけでもう、ムツツリーニは穴という穴から血を噴き出して
いた。

・・・実はと○だちが作成したウイルスに感染したんじゃないかって時々思う。

「止めるなお前ら！ 俺は今から、この婚姻届を奪取————」

「あ、因みにこの様子はケータイで代表にも知らせてあるから。」

『・・・雄二、帰ってきたらとりあえずガスバーナー・・・！』

「ごめんなさい。 脱水症状になるくらいにごめんなさい。」

工藤さんは毎回丁寧だなあ。

ハハハッ、見てよ！雄二に死亡フラグが立ってるよ！

「・・・さて、次はアンタらの番よ。」

「今日ハ、才勉強会デスモンネ。 シツカリト、教エテアゲマスヨ？」

「はい！ ・・・その身をもって。」

『・・・皆、とりあえず私の代わりに雄二に制裁を下しておいて・・・』

そして僕らにもこれ以上ないくらいの死亡フラグが立っているよ。でもここで諦めちゃダメだ！

喧嘩なら誰にも負けない雄二、暗殺術を心得ている宗太郎とムツツリーニ。この頼れる仲間は————。

「・・・・・・・・・・（ビクンッビクンッ）」

「今まで楽しかったぜ、ありがとう。」

「ぐふふふふ　ふふふふふ　うふふのふ」

———みんな、目が死んでいる。



「・・・ふう。遅れてすまんの。姉上が————って明久!?!? それに皆!?!?」

「あ、来たんですね木下君。」

「な、何故男性陣が皆流血で身を染めたまま逆さに宙吊りにされているのじゃ!?!?」

「木下。これが不潔な考えを持った、男共の末路よ。」

「い、いや。幾らなんでもこれは余りにも酷すぎんかの!?!?」

「いいんです。センサー達には、たーっぷり反省してもらうんですからっ。」

「・・・・一体何をやったのじゃ、お主らは・・・・。」

第三話 強化合宿 〔到着〕（後書き）

いよいよ楽しい（？）宿泊スタートです。

早々に流血沙汰ですがね。

それにしても内容はバンバン出てくるのにバカテスト作るのが一番難しい・・・。

井上堅二先生も苦心してらっしゃるだけがありますね。

では、感想等お待ちしております。

バカテスト 四問目 数学

問題

			1	
		1	1	
	1	2	1	
1	3	5	3	1

このような二項定理における係数を三角形に並べたものを何というか。

姫路瑞希の答え

パスカルの三角形

教師のコメント

正解です。二項定理の問題でよく、 X の四乗の係数などを聞かれる問題があります。

そういったときに使ってみると、非常に便利な三角形です。因みに似たような名前にルーローの三角形というものがありますが、これは三角形を膨らませた定幅図形なので全くの別物です。

出雲桃の答え

ヘクトパスカルの三角形

教師のコメント

気圧でも計るつもりですか？

土屋康太の答え

数字三角形

教師のコメント

今日も先生と一緒に職員室で勉強しましょう。

吉井明久の答え

こんなの三角形じゃない！

教師のコメント

君も土屋君と一緒にLet's Study。

第四話 強化合宿　（お勉強タイム）

「—————ムガ、ムガグガグフツ（ま、全員揃ったし始めるか）。」

「—————ムググ、ググゴグゲホゲホツ（雄二、包帯の所為で全然聞き取れないよ）」

「—————・・・ガハゴフツ（吐血）」

「・・・お主ら、よく生還できたの。」

僕らは現在、霧島さんの家に来ている。

無論勉強会をするため。で、何で包帯姿かというと——雄二の婚姻届奪取に付き合わされて女子達にボコボコにされて・・・。

「アンタら、反省した？」

「次やったら穢○転生でも復活不可能にしちゃいますよ？　明久クン・・・？」

まずいますい。僕の肉体が跡形も無く消されるのはゴメンだ。さ、これ以上厄介ことになる前に勉強つと。

「待て。その前に一つ確認ごとがある。」

「さ、坂本さん！　怖いから包帯を取らないでくださいっ！」

「桃。雄二をこんな風にしたのはお前らなんだからな？」

各言う宗太郎も、全身絆創膏だらけだ。

けれども涙を流す出雲さんに勝てず、雄二は言葉を詰まらせた後口だけ包帯を巻かずに告げた。

「宗太郎、出雲。勉強を始めるに当たってお前らの得意不得意科目を知っておきたい。」

ああ、なるほど。確かに短時間で勉強をするのならまず無駄を省きたい。

得意科目よりも、苦手科目を徹底的に勉強したほうが点数は上がりやすい。

ま、ムツツリーニは保健体育以外は救いようがないんだけどね！

「俺は国語と古典、生物に明るい。桃は・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・はあ」

「せ、センチー！？ 桃のいいところ一つもないんですか！？」

「じゃあ何が得意なんだ？」

「家庭科です♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ごめんなさい坂本さんっ！ ですから包帯を取らないでくださいーっ！！」

まさかここに来て戦力外が居るとは。

でもまあ、僕も日本史世界史以外は殆ど戦力にならないからなあ・・

・。

「ま、折角だ。お前らの召喚獣でも見ておくとするか。」

「だね。」

「え？ 召喚獣・・・ですか？ 確か先生の許可が出ないと出来ないはずじゃ・・・。」

召喚獣、それは試召戦争においての兵隊。

点数を見ると共に、召喚獣の扱いにも慣れてもらいたい。でもそのためには学校の先生による召喚承認が必要だ。
でもそれは凡人の場合。僕らは凡人じゃない。

「雄二。忘れてないよね？」

「当たり前だ。――――起動！」
アウェイクン

雄二が左手を天井に向けて掲げる。

するとそこから立方体のように、召喚フィールドが広がった。

これが僕らが試験召喚大会で勝ち得た勝利品、その名も『白金の腕輪』だ。

二つあってそのうち雄二は召喚フィールドを作成できる『代理召喚型』を持っている。

「な、何だこれ！？」

「す、凄いです・・・！」

この科学とオカルトと偶然の結晶の素晴らしさに新入り二人が驚い

ている。
無理もないけどね。

「このフィールド内なら召喚できる。さ、やってみろ。」

「おう。えーと・・・サモン召喚っと。」

「も、桃も頑張ります！サモン召喚！」

二人の足元から眩いばかりの幾何学模様が現れる。
そこに現れたのはデフォルメされた二匹の召喚獣。

「わあー！ センセーの召喚獣、暗殺者っぽくてかっこいいですっ
！！」

「・・・それ言われると複雑なんだが・・・で、桃のは槍か。」

宗太郎の召喚獣は、投擲ナイフを持った暗殺者の姿。何となくムツ
ツリーニに似ている。

出雲さんの召喚獣は、槍を持っている。
っていうか二人とも和風なイメージが強いなあ・・・。

「よし、点数が出るぞ。」

「因みに科目は何だ？」

「悪い、この白金の腕輪で作成したフィールドの科目はランダムに
選ばれるんだ。」

そう、ギャンブル要素がこの通り高すぎる。

おまけに雄二の点数も消費しちゃうから、ここぞという時でしか使えない。

で、科目は見たところ国語か。どれどれ……。

『科目 現代国語

鳴滝宗太郎

&

出雲桃

0点

&

35点

』

「……………」

「さ、坂本さん！ だから包帯外してその上チェーンソーを持たないでくださいっ！！」

「黙れ！！ まあ出雲は予想通りだからいいとして宗太郎！！ 暗いじゃねえか！！！」

だよね。さっき『国語や古典、生物に明るい』って言うておきながら0点なんて。

希望の光が一筋も見えないじゃないか。

因みに予想通りといわれた出雲さんは隅っこで体育座りをしていた。

「実はさ、名前のところを無記名にしちまってさ。」

「……………仕方がない。今の所は割り縄の刑だけで済ませて

やる。」

「スマン雄二。 どう考えてもそれは処刑にしか見えない。」

あ、雄二も好きだったんだね。『FATAL FRAME』。
アレ怖いけど中々面白いんだよね。バッドエンドもあるけど。

「・・・しかし本当に文系が得意なのか？」

「当たり前だ。俺は本が大好きだからな！」

「じゃあ『長月ばかり』の第百三十段を暗唱してみろ。 それが出
来たら土下座してやる。」

「えー？ あれを暗唱なんてボクでもちょっと難しいかな？」

雄二がなんともキチガイな発言をしてきた。

そんな事、僕は無論のこと工藤さんだってお手上げのような事を言
っている。

大体そんなこと出来るわけ

「長月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝は止みて、朝日い
とけざやかにさし出たるに、前栽の露こぼるばかりぬれかかりたる
も、いとをかし。

透垣の羅文、軒の上に、かいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨
のかかりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれ
にをかしけれ。

少し日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに枝のう
ち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじう
をかし、言ひたることどもの、人の此処にはつゆをかしからじと思

ふこそ、またをかしけれ。

———何なら現代語訳しようか？」

「ごめんなさい。心の底からごめんなさい。地獄の底までごめんなさい。」

何この人。ここまでいくとある意味で姫路さんレベルじゃないかな！？

本が好きだからって此処まで出来るものなの！？

だったら僕はエロ小説の35ページの三行目にある台詞すら余裕でいえるよ！？

「ま、とにかくこれで納得してもらえたか？」

「ああ。———それじゃ今日は宗太郎や工藤もいるし、古典の勉強にするか。」

「「ええ———っ!!?」」

そりゃ当然だろう。Aクラス並みの学力が揃っている以上、教えてもらうのは当然だ。

だけれどもそれに対して上がった反発の声二人。

それは古典を鬼門とする美波と秀吉のものだった。

「お前ら、苦手科目だからこそ頑張って貰わにゃ困る。」

「いいじゃないの！　そこまでAクラス打倒が必要なの!?!」

「そうじゃ雄二！　友人に強制させる必要はないはずじゃ!」

「そうはいかん！ 何としても俺はこの家、現状、地獄から脱出しなくてはならない・・・！」

雄二は試召戦争でAクラスに負けて、霧島さんと付き合っている（現在書類上婚約中）。

だからこそこうやって試召戦争に熱を入れているんだ。

けれどもそれに巻き込まれる美波や秀吉は何か可哀相というか不憫だというか・・・。

「今この一時の苦しみに比べたら、アンタの人生なんて安いもんなのよ！」

「その通りじゃ。 姫路が転向せずに済むならCクラスで十分じゃ。」

「テメェら。 明久に好きな人間をバラしてやろうか？」

「「ごめんなさい神様仏様坂本雄二様。」」

うおお！？あの二人が雄二に対して土下座しているうううっ！！？
まあ、好きな人をバラされるのは女の子だったら恥ずかしいもんね。
ただ一つ解せないのは何故僕にバラそうとしたか、である。

「まあまあ坂本君。 ここは二人にチャンスを上げたら？」

「何だ工藤。」

「ボクらがこれから古典の問題を出すから、それを出来たら免除！
ってのはどう？」

「「ありがとうございますっ!!」」

「うおおい待て二人とも！ 俺はその提案をまだ呑んではない！
！」

さすが工藤さん。僕らの知るメンバー中で最も優しいなあ。

やけに楽しそうな顔になるけど、それは気のせいだね！

仕方がない。このままだと美波や秀吉が可哀相だし、僕も助け舟を出してあげるかな？

「雄二。ただでさえ精神も悪魔なんだからここで優しさを見せたら（ブスッ）その優しさが僕の視界に入らないいいいいッ!!」

コイツ、チョキで視界を潰してきやがった。

この通り視界は潰されたけれども、チツという舌打ちから仏頂面で腕を組んでいるシーンが想像できる。

「しゃーねな。参加してくれた工藤に免じて、テストで判断してやる。」

「ありがとうございます！」

「うむ。ワシらに救いの道を与えてくれたこと、感謝しておるぞ工藤。」

あれ？僕フォローをしたつもりなのに感謝の対象に入っていないの？
視界が回復したそのときには、雄二と工藤さんと宗太郎、姫路さん
で問題を決め合っていた。

うーん。この四人が出題するとなると、結構難しくなりそうかな？
そして最初の出題者は・・・工藤さんか。

「じゃ、問題。『をかし』、を使って文章を作ってみて。」

ほうほう。『をかし』、か。

えーと確か・・・（古典単語辞典で検索中）・・・『趣がある』だよね！

「わたしのゆめは“おかし”のいえにすむことですっ☆」

「嘘だああ————ッ！！　これは罠だ！！　“可笑^{おか}し”いじゃないか！！」

「島田。子供の作文を抜粋した上に無駄な☆と無駄な平仮名表記がムカツク。

そして秀吉、DEATH NOTEの台詞を抜粋した上に無駄な演技力の高さがムカツク。」

あらら。雄二はご機嫌斜めだ。

まあ、どう考えても古典じゃないしね。・・・どうでもいいけど、この二人。古典だけなら僕よりバカなんじゃ・・・？
何て考えているうちに、次は宗太郎が出題者か。

「問題。　“おはします”で簡単な文作ってみろ。」

おはします？何だろう、敬語なのかな？

えーと・・・（古典単語辞典で検索中）・・・「あり」の尊敬語で「いらっしゃいます」か。

さて、この二人はどう出る・・・！？

「あら翔子さん。　この“お箸^{はし}マス”コミでも取り上げられた一品

ですわよ？」

「“おっはー☆ 島州” 隆久だよー☆」

します

「島田。 ここで翔子の名前を出した上に無理矢理奥様会話にはめ込んだ努力が空しい。

秀吉。 某朝の子供向け番組の掛け声を出した上にフィクションの人物を出した努力が悲しい。」

雄二の機嫌はこの時点で垂直だろう。

最早斜めどころの話ではない。これじゃ、工藤さんの提案も棒に振ったようなものか。

「最後は私ですね。 えーと、枕草子からの出題ですつ。」

おお！さすがは姫路さん。 出題の範囲を明かすと共に有名な古典作品を選んでくるとは！

「春はあけぼの。 夏は夜。 秋は夕暮れ。 では冬は？」

「「寒い。」」

「古典に決定だな。」

こうして姫路さんの 機転と優しさも空しく、僕らは古典を勉強することになったのだった。

☆

「……づづがくれだあ」

「……ワシもじゃ……」

「……っ！（パシャパシャ）」

約二時間にも及ぶ勉強を終えて、美波と秀吉は机に突っ伏していた。これもまた絵になるというのか、ムツツリーニが恐ろしい勢いでカメラのシャッターを切っている。
週末明けの収穫報告祭が楽しみだ。

「もう五時半か。そろそろ飯の仕込みでもしねーとな。」

「そう言えば雄二、冷蔵庫の中身使ってもOKなの？」

「ああ。ちゃんと元に戻しとけて釘を刺されたがな。」

さすが霧島さんだ。

寛容だけでなく、合理的な条件を出すなんて。
とにかくこれで晩御飯に関しては何も心配する事がないね。

「それじゃ、前と同じく僕と雄二とムッツリーニでいいかな？」

「俺は構わない。寧ろ元々その予定だった。」

「……………同じく。」

料理に関しては、正直そこら辺の奥様にだって負ける気はしないこの三人。

何だか美味しそうな食事が作れるな、今夜も。

「あ、あのっ。 私が作りま」

「「「Let's 男だけの料理ショー!!!!」」」

危ない危ない。姫路さんの声を掻き消さなきゃ、あの大量殺人兵器を喰らうのは僕たちだ。

最悪の事態だけは避けられたので、早速キッチンへ。

前は見えなかったけど、霧島さんの家は冷蔵庫も大きいな。

「どれどれ。 何が冷やされてるのかなーっと。」

「そういや俺も中身は見てないな。 今の内に拝見して献立を決めるか。」

「……………（ブシュッ）」

ムツツリーニ。君は一体冷蔵庫のどこにエロスを感じ取ったんだ。
まあそれはさて置き、中身は————・・・

・洗脳薬

・惚れ薬

・媚薬

「……………」

僕らは、開けてはならないパンドラの箱を開けてしまった。
でも今ならまだ間に合う。僕らはゆっくりと、パンドラの箱を閉じた。

「あれ？ お料理作るんじゃないですか？」

「すまない出雲。みんなに聞いてくれ。」

雄二はポケットから携帯電話を取り出す。
そして置いてあった新聞の広告を参考に電話番号を打ち込む。

「…………ピザは、何がいいかって。」

今晚の夕食はピザに確定したのだった。

第四話 強化合宿 〱お勉強タイム〱（後書き）

どうも。テンペストです。

そろそろRー15な内容出したいなーと思いつつそれはまだ先の話。しかし考えてみれば今回はそんなに面白くもなんともないという罨orz

新たなコラボレーションもぼちぼち考えています。銀魂辺りにしようかな。

では、感想お待ちしております!!!!!!

バカテスト 第五問目 生物

問題

とある実験で、イモリの細胞期の胚を二つ用意した。

そして卵割面に現れる灰色三日月環を髪の毛で一方は軽く二分して、もう一方は固く二分して縛った。

すると軽く縛られたほうの胚からは双頭の異常な幼生、もう一方は完全な二匹の幼生が誕生した。

この実験結果から分かる事を簡潔に述べなさい。

姫路瑞希の答え

灰色三日月環には、発生を調整する力がある。

教師のコメント

正解です。

出雲桃の答え

イモリさんが可哀相です。

教師のコメント

出雲さんは優しいですね。

土屋康太の答え

・・・縄プレイ・・・っ（ブシャアアアッ）

教師のコメント

何故イモリの卵が縛られただけで君はピンクな妄想に浸れるのですか。

吉井明久の答え

異常を持って生まれてくるくらいなら死ねばいい。

教師のコメント

・・・いや、まあ、可哀相ではあるんですが。

吉井君はある意味で正しいかもしれないね。昔、異常児が生まれてきたご家族が無理心中をしたという悲しい事件もあったくらいで・

・・・っていうかこれは生物のテストです。

そういう話は哲学の授業でお願いします。

坂本雄二の答え

死ねばいいのに。

教師のコメント

更に酷いことに。

第五話 強化合宿 ㄱ一日目の夜ㄱ（前書き）

大変お待たせしました！え？キサマなぞ知らん？ご、ごもっともです．．．。

第五話 強化合宿（一日目の夜）

冷蔵庫の中身を確認してから20分後。

待ちに待ったピザが届き、皆で食べていた。幸いにも、コーラなどの類が合ったからいいものの正直このコーラの中にも霧島さんが菓を仕込んでいたとしたら・・・ぞっとする。

とにかく、一通り食べて満腹になったところで時計の長針短針は7..00丁度を刺していた。

「あ、もう七時か。」

「ん？ どうしたんだ明久。」

「いや、明日の朝食のために何か買いたいなーって。」

だって霧島さんの家の冷蔵庫の中身はどうあっても使いたくないから。

「ま、そーだな。」

「たださすがに霧島さんのお金使うのはまずいでしょ？」

「そんな事ないぞ。 翔子から100万渡されてる。」

「100万！？ 僕だったら10年生活が出来る！！」

「一年間一万円生活！？ どれだけの極貧生活を送ってきたんだ！」

まあ今は姉さんの監視下に置かれてるから、仕送りも効果的に使わ

ざるを得ないんだけどね。

いずれにしても使えるお金があるというのはありがたい。
さすが霧島さん、ちゃんと僕らがここに来る事も配慮してくれているなんて。

「で、買出しは明久が行くのか？」

「うん。 近くに行き着けの安いスーパーがあるし。」

「あ！ な、ならウチがついていくわ！」

「ず、ずるいです美波ちゃん！ 明久君っ、私がお供します！」

すると美波と姫路さんがお供に名乗り出た。

二人とも、何か買いたいものがあるのかな？

見た所他の連中は行く様子も無いし、ただ女の子を夜中に連れ出すのは忍びない。

でもこの人数だから必然的に買い物量は多くなっちゃう。誰か付き添いは欲しいところだなあ・・・。

「じゃあ美波。 悪いけど着いてきてもらえる？」

「えっ！？ ウ、ウチ！？ やったあーっ！！」

「そ、そんなあ・・・！ 美波ちゃん、ズルいです・・・。」

あれ？ただ料理の観点から美波の方が適任かなって思ったただけなのに。

どうして片や大喜びして片や落ち込んでいるのだろう。

「姫路さん、何か買ってきて欲しいものがあれば買ってきてあげてください。」

「いえ、そういう意味じゃないから放っておいてください……。」

あれ？ どうして姫路さんは悲しげな表情をしているんだ？

「へええ。この状況で美波ちゃんを連れ出すなんて、吉井君はやるねえ。」

「な、何かな工藤さん……。」

どうしたわけか、工藤さんがニヤニヤ顔でこっちを見てくる。
な、何だろ……顔が熱い……！

「あ、明久。」

「な、何かな宗太郎？」

「悪いんだけどジャンプとサンデーも買ってきてくれないか？」

「わ、分かったよ。」

いいタイミングで宗太郎が割り込んできてくれた。

ふむ、ジャンプとサンデーか。丁度僕もONE PIECEの続きが気になってたし。

「……明久。」

「何かなムツリーニ。」

「・・・・・・・・ビジネスジャンプを・・・・・・・・（ブピュッ）」

なるほど。エロ雑誌か。

ただ美波が同行する以上、それは諦めてもらわねば。

「秀吉や工藤さん、出雲さんは何か欲しいものはある？」

「ワシは特にないのう。」

「あ、桃もお構いなく。」

「ボクはビジネスジャンプかな。」

工藤さん。少なくとも君が読んでいい本でもないはずだ。

「じゃ、とにかく行って来るよ。行こう美波。」

「え？ あ、うん！」

あれ？何かテンパってるなあ。

ひよっとして夜道が怖いんだろうか。そういえば、美波って怖いものが苦手だっけ。

これはちよっとミスったかな・・・。

「美波、震えるくらいだったら僕一人でも行くけど？」

「な、何言ってるのよ！ さ、行くわよ！！」

「うえ？！ ちょ、わ！！」

美波に引っ張られる形で、強引に家の外に出ることになった。
この季節でもやっぱり夜は冷えるなあ。

でも幸いと言っているのか、目的地であるスーパーは目の前だった。

「で、アキ。 何を作るの？」

「そうだね……。 明日の朝はホットドッグにでもしようか。」

切ったコッペパンに焼いたソーセージとレタスをはさむだけの、手軽且つ美味しくて栄養も取れる一品だ。

結構重宝したりするんだよね。

「ホットドッグね。 ウチも好きだからいいわよ。」

ドイツ暮らしをしていた美波からは当然のようにOKをもらえた。
さて、朝食は決まったから昼食と夕食も考えなきゃならないんだけど。

「どうせなら皆でつつけるものがないよね。」

「つつくねえ……。 アキは何をつつきたいの？」

「あのビールのポスターに乗っている水着のお姉さ『バギユウン』
目が、目がああああっ！」

一瞬にして視界が暗くなった。

どうやら銃弾のように突き出された美波の人差し指が原因らしい。
実は美波も姉さんと同じ組織に所属している暗殺諜報機関の一員だとは。

「全く・・・。ありきたりだけどカレーなんてどう？」

「カレーか。うん、カレーが嫌いな人っていなさそうだしいいんじゃない？」

「決まりね。それじゃ、スーパーに行きましょう。」

こうして夜道を歩きながらスーパーへと向かっていった。

まあ、距離も短いし街灯と意外に多く歩いていた通行人のおかげでそんなに恐怖は感じられない。

にも関わらず、美波が傍から離れようとしなない。そんなに怖いのかな？

「さ、美波。ついたよ。」

「え？ あ、うん。」

僕がこういうと美波は残念そうに離れた。

むう、怖くも歩けど夜道を楽しみたかったのかな。全く女の子というものは難しい。

とにかく早く買い物をしなきゃ。

「さてニンジン、ジャガイモ、タマネギ・・・。」

「お肉に・・・カレーのルー・・・。」

「そしてジャンプにサンデー、三冊分のビジネスジャンプと。」

「ベギボギイッ！」

刹那、そんな鈍い音がスーパーの一角で響き渡った。

「おぎゃああああっ！ 骨がよい子に見せられない形態にーっ！」

「このバカ！ 何エロ雑誌さり気におうと買おうとしているのよ！」

「だ、だってムツツリーニと工藤さんに頼まれたんだから！」

「後一冊は？」

「僕のあいた空白を埋めるために（ゴシヤ）使用しませんからこの握りつぶされた左肩を修復してえええっ！」

だからどうして事あるごとに僕の骨を潰すんだこの人は。

「全くもう・・・そんな事をして好きな女の子に失望されたらどうするのよ？」

「僕の事を好きな女の子？ それは無いよ」

笑いながら軽く手を振って見せた。

謙遜、って言うのもあるけどこれは僕の本音のつもりだ。

でも————何故か美波はとても寂しそうな顔をしていた。

「・・・美波？」

「どうして・・・そんな事言うのよ？」

え？ どうしてって・・・ごく当たり前のようにも聞こえるけど。

「だって、一応僕はバカだから」

よく他人に言われてムツとなるし冥府の底に突き落としたいと思うことはある。

でもそれは当然なんだ。でなきゃFクラスなんかにはいない。

何とか点数を上げている歴史だって努力あつてのものだ。

「姫路さんや美波みたいに頭よくないし、宗太郎みたいに本が大好きでもなきゃ秀吉みたいに演技が得意って事も無いんだ。だから・・・」

自分で言うのもなんだけど、低脳な僕と付き合っその人が幸せになれるわけがない。

笑ってそれ続けようとしたら————平手が飛んできた。

「ったあ!？」

「アキのバカ! アホ! 鈍感! ヒモ!」

「ヒモはないでしょ!？」

バカならともかく、鈍感、はたまた紐って何さ!？そんなに僕の扶養能力が信じられないの!？

いや、まあ・・・美波をお嫁さんにするって決めたわけじゃないんだけどね。

「ウチはねえ! そんなの関係ないの!」

「へ?」

「それにね、アンタのそういう純粹さが好きな人もいるのよ!？」

え？ そうなの？

「だからね・・・アンタの発言はその人を傷つけたことになるの!」

・・・それは考えても見なかった。

確かにそういうことなら、僕の発言はその人にとって許されるものじゃない。

だから美波も怒ってくれたんだ————ってあれ？

「なんで美波がその人の代弁をしてるの？」

「な、何だっていいでしょ!」

今度はグーが飛んできた。なんと理不尽な。

っていうかこの人まだ続けようとしている。おっと、今度は蛇翼○天刃か。

「美波タンマ!」

「何？ アンタまだ小便済ませてなかったの？ それとも神様へのお祈り？」

「じゃなくて! ここスーパーのど真ん中だから!」

そういいながら僕は周りを見渡せさせた。

周りのお客たちがまじまじ、というよりニマニマと僕らを見つめている。

ただ流血沙汰を實に来たと言うより、なんかこう・・・頬が熱くな

りそんなそんな目線で見に来ているのが解せない。

「~~~~ツ!! アキ、さっさとお会計済ませるわよ!!」

「うわあっ!?!」

そのまま凄まじい怪力で美波は僕を引っ張っていった。
何をそんなに慌てているのだろう。というより恥ずかしがっている
ようだったなあ。

☆

「~~~~~ってことがあってね」

「島田、同情するぞ・・・」

「明久、それは島田にとって公開処刑に近いのじゃぞ・・・」

買い物から戻ってきて、雄二や秀吉から言われたのは劳いの一言と
共にそんな言葉だった。

片や同情、片や呆れの視線。

うーん。あんな流血沙汰は僕の所為だとも言いたいのか。

「あれ? ムツツリーニは?」

「あそこで血の海に沈んでいるぞ」

雄二が指差したその先には血に濡れたビジネスジャンプを手にしながら沈んでいる寡黙なる性識者の姿があった。

何だ、折角買ってきたのにもう読めなくしたのか。

「おいムツツリーニ！　しっかりしろ！」

「・・・止めるな宗太郎・・・」

「いや、血がドクドク・・・ってかダバダバ蛇口のように出てそれはないだろ！？」

「この・・・クノイチの縄プレイを見届けるまでは・・・」

「このページ、すっかり血まみれで何も見えないんだけど」

「・・・ならば・・・想像するまでっ・・・！　（ブシャアアアッ）」

「ムツツリーニィ！　妄想で死ぬなぁーっ！」

なんてやり取りを、宗太郎と行っているムツツリーニ。

必死に輸血してあげている宗太郎は何て優しいのだろうか。

「・・・さて、そろそろお風呂に入ろうか」

「そうだな。ムツツリーニの（後始末の）ことは宗太郎に任せておきや大丈夫だろ」

そうだね。輸血の仕方も手馴れている。さすがは医者志望ということ

ころか。

と、お風呂場へ向かおうとしたその時僕の左手に握力を感じる。

「? どうしたの秀吉?」

「入るぞ」

「入ってきたらいいじゃないか。 翔子の奴、お前を考慮して秀吉湯も作ったし」

「違うのじゃっ! わしもお主らと入ると言ったのじゃ!」

Oh・・・秀吉、君はまだそんな事を言うのかい?
そんな事を言っちゃあ僕の股の間に生息するハガネールが黙っちゃいないじゃないか。

「OK牧場。 秀吉、一緒に————のわぁーっ!」

「チッ、外したか・・・」

飛んできた包丁を僕は間一髪で回避した。
当然飛ばしてきたのは目の前の憎き逆毛野郎。

「雄二、どういうつもりさ? 秀吉に興味ないって豪語している男が」

「そうじゃない。 明久、あれを見ろ」

雄二が指差した先、そこには未だに失血と戦うムツツリーニと宗太郎の姿があった。

「・・・来世は・・・縄プレイ用の縄でありますように・・・」

「それでいいのかお前の来世！　ってか脱出するために斬られるのがオチだぞ！」

「・・・なら、濡れて交換されるベッドシートでいい・・・（ガクッ）」

「そんな未来に託していいのか！？　ムツツリーニいいいい！！」

なんて事をのたまっている。これはもうダメだな。

「明久」

「何、雄二？」

「お前はあれを見てどう思う」

「そのまま死んでしまえと思ったよ」

「俺もそれと同じ気持ちでお前を殺しに掛かったんだ」

「それ一体何の弁明になっておるのじゃ・・・？」

そうだった。僕も含め、Fクラスは時に謎の団結力を発揮する。私怨の塊ともいえる彼らを繋ぎとめているのはただ一つ。

「つまり・・・俺はお前の幸せが許せねえんだよ」

———こういう奴だった。

強化合宿一日目にして秀吉を巡っての骨肉の争い。

なんとしてもここで秀吉と混浴してポイントゲット、そのままYes, fooling Loveするんだっ！

「それでも食らえっ！」

「うおっ！ 血塗れのビジネスジャンプ汚ねえ！」

僕は咄嗟にムツツリーニから取り上げたそれを投げつけた。

他人の鼻血まみれのビジネスジャンプは、さすがに雄二も触れたくないらしい。

僕も触るのはゲボが出るほど嫌だったけどこの一時の苦しみと秀吉との裸の一時、秤にかけるまでも無いっ！

「行くよ秀吉！」

「おわ！ あ、明久！」

「待て、俺も！」

僕はそのまま秀吉の綺麗な手を握って部屋を駆け出た。

ああ、秀吉の手。何てすべすべで気持ちいいんだろう・・・ってちよっと待て。余計なオプションまで居やしないか？

「宗太郎！ なんで君も来るのさ!？」

「ご相伴に預かりたいと」

「因みにムツツリーニは？」

「あれをどうしろと？」

それはそうだ。あれに一々手を尽くしてはキリが無いっていうものだよね。

って言うかあれだけあった輸血パック、もう使い切ったのかな？
立った一冊のビジネスジャンプで命を散らせられるムツツリーニ、
君こそ漢の中の漢・・・！

「うむ！ 宗太郎もワシと裸の付き合いをしてくれるのじゃな！？」

「ああ！ 勿論さハアハアハア」

きつと息が荒いのは全力疾走している所為ではない。

「ま、宗太郎は仕方ないか。 さあ行かん、理想郷^{アガルタ}へ！」

角を曲がるとそこには男という暖簾がかかれた部屋が。
間違いない、あそこは以前僕らが利用したお風呂場だ！
カララ、と音を立てるとそこには――――。

「お待ちしてましたよ明久君♪」

黒い笑顔を貼り付けている姫路さんが待ち受けていた。

「「さらばだっ！」」

「あ、おい明久！？ 宗太郎！？」

即座に逃げ出す僕たち。

宗太郎も昼間の惨劇を思い出してかその場を逃げ出す。

とてもいい判断だと思う。けれども僕達は分かってなかった。それすらも、ムダだったって事が。

「逃がしませんよセンサー？」

「桃！？」

出雲さんが退路をしつかり塞いでいた。

しかも顔には笑顔、その癖壁に当てている手には青筋が浮かんでいる。あ、壁に輝が入っちゃった。

こ、これはもうチェスでいうチェックアウトって奴だろう。

「明久、チェックメイトな」

「わ、分かってるよ！」

気休めって奴だよ。ね？

秀吉—————ってあれ！？

僕の隣に

いたはずの秀吉は！？
マイエンジェル

「に、逃げるのじゃ二人とも！」

「この人達、本気で吉井君たちをコロ—————きゃあっ！？」

「木下、工藤さん。　ウチらはガールズトークでもしましよ☆」

この合宿メンバー最後の良心とも言うべき秀吉と工藤さんはそのまま、美波によって引きずられていった。

嗚呼、ここで終わるのか僕の人生。

「いえいえ、終わりじゃありませんよ？」

「その後明久君たちにはネットアイドルとして活躍して貰う予定なんですから」

「「いやだぁーっ!!」」

「—————そこまでが、僕らが覚えている一日目の記憶だった。」

第五話 強化合宿　～一日目の夜～（後書き）

改めて皆様、大変お待たせしてしまいました。テンペストです。
この度、やっとひと段落ついたところでございます。

もうこのまま消えちまうんじゃないかねーの？って思った貴方。一時もそんな事を考えはしませんでしたが、暇って思うように取れないこの現状に頭を悩ませていました。

しかし本日を持って怪体真書0の原作が連載終了と言うことで書き上げました。

こうなってはファンであった私としては続けないわけにはいかないかと憤慨した結果がコレです。石を投げないでください。

今後も不定期更新となり、バカテストの掲載率も悪くなると思います。が続けて生きたいと思いますので長い眼で見てやってくださいませ。

では今回も読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2156q/>

バカとクロスとドタバタ騒動

2011年11月15日14時20分発行